

---

# 紅梅記 【黎明編】

稲葉ほうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅梅記 【黎明編】

### 【コード】

N9319E

### 【作者名】

稲葉ほつき

### 【あらすじ】

栄邑の街に住む少年許龍峨は、山の中で出会った男から白き牡鹿の伝説を聞かされる。「白き牡鹿現る時、新しき国興る」と。謎の少女が残していった佩玉”白凰双龍佩”を巡る争奪戦が繰り広げられる中、それぞれの思惑は次第に一つの形を結んでいく。

## 第1話（前書き）

この作品は『紅梅記』という中国風ファンタジーの外伝として作成されたものですが、本編からは独立したストーリーにしております。

なお、本編については現在、途中まで書き進めた状態で止まっております。この作品が無事完結しましたら、続きと共に掲載する予定です。

## 第1話

当時の国名が“暁”と呼ばれ、都を華都に定めていた頃の事。第11代微王が若くしてこの世を去った後、その弟憐が即位し第12代瑞王となつて国を治めていた。しかし、暗愚な暴君であつた瑞王は、自らの私欲のため民に圧政を課し佞臣を重用したため、長らくの平和な治世にも翳りが見え始めていた頃だつた。

華都から遠く離れた栄邑の街外れに、許龍峨という名の少年が住んでいた。山に入つては薬草や柴を拾い集め、それらを売つて生計を立てていた。ある日、いつものように山に入った龍峨だつたが、その途中今まで見た事もない真っ白な牡鹿に出くわした。その美しい牡鹿は龍峨の存在に気がつくつと、まるでついて来いと言わんばかりに目の前を進んでいく。その姿に誘われるように牡鹿の後を追いかけて始める龍峨であつたが、山道を歩き慣れているとはいえ、それは困難を極めた。途中、何度となく牡鹿の姿を見失いそうになるのであるが、まるで龍峨が自分に追いつくのを待つかのように、その都度立ち止まつてこちらを向くのであつた。

そんな奇妙な追跡がどれ程の時間続けられたのだろうか。初めは白い牡鹿が珍しくて後をつけていた許龍峨だつたが、気がつくつと日はとうに西の方角へと傾き始め、辺りには夜の気配が忍び寄つていた。日頃から慣れ親しんだ山とはいえ、こうなつてしまつては帰る方角も分からない。薄闇の中にあつても仄かに青白く光る牡鹿を頼りに前に進んでいくより方法がなかつた。

牡鹿に導かれるままに山の奥深くへと入り込んでしまつた自分を怨みつつも、大人しく前方の白い光の後に従つていくつと、やがて行く手に焚き火の明かりが目に入った。どうやら許龍峨と同じくこの山中で道に迷い、夜を明かそうとしている者が他にもいるようだ。気がつくつと先ほどまで前方にいたはずの牡鹿の姿は消えていた。こうなつてしまつては、もはやその明かりの射す方へと進んでいくし

か道は残っていないかった。

許龍峨が焚き火に近づいてみると、旅装束に身を包んだ男が火にあたっているのが見えた。表情は暗くてよく見えなかったが、その風貌は醜悪であった。辺りには他に人の気配も無かったが、許龍峨はこの見知らぬ男に声を掛けるべきかどうか迷っていた。

そんな許龍峨の気配を察知したのか、男の方からこちらに話しかけてくるのだった。

「そんな所にいつまでも立っていないで、こっちに来て火にあたっ  
てはどうだい？夜が明けるまではしばらく時間もかかるだろうし、  
かなり冷え込むよ。」

男のその言葉に促されるままに焚き火の方へと近づくのだが、用心のため少し離れた場所へと腰を下ろす。

「何だ、随分と若いお客さんだな。こんな夜更けに山を彷徨っていると  
ころをみると、さては道に迷ったな。こんな物しかないが、食  
べるか？」

懐から乾パンのような食べ物と竹の水筒を取り出す。

「ありがとうございます。遠慮なく頂きます。」

一応、男に礼を言ってお食べ物を受け取る。こんな乾パンであっても、  
水で流し込めば食べられるだろう。何より、朝から何も食べていな  
いのだ。少しは腹の足しになるだろうと思いき口にしてみると、その  
見た目とは裏腹に思いのほか美味しかった。

「しかしまあ、無事でよかったです。ところで、どうしてこんな場所  
まで迷い込んだんだ？夜は長いんだ、良かったら話を聞かせてくれ  
ないか。」

醜悪な風貌とは異なり、性格は穏やかで優しそうだった。初めの  
頃の警戒心も徐々に薄れつつあった許龍峨は、森の中で白い牡鹿に  
出会ってからの経緯を話し始めるのだった。

「へーえ、森の中で白い牡鹿の後を追っていたら、ここに辿り着い  
た・・・と。」

そう呟くと、男は何やら考え込むのであった。

「いいか、少年。この国では鹿が大切にされているのは知っているよな？」

「はい、“鹿は古来より聖獣として敬われてきた”、父よりそのように聞いております。何でも、不老長寿をもたらす仙人の乗り物であったため、鹿自身にも僅かながらその力が備わっているとか。」

「若いのに、良く知っているな。古の王達はその靈力にあやかろうと、“鹿”と名の付く建物をこれまで数多く建てたんだが、その中でも一際立派だったのが『鹿王台』と呼ばれる白い建物だったんだ。

鹿王台に一人の老人があり。王に問う。何故民を苦しめる。王答えて言う。白き牡鹿は不死の証。不死の王即ち不滅の国なり。老人が答えて言う。盲の王、牡鹿に跨り地に転落す。王、老人を殺さんとするも既に姿なし。後に王、追われて鹿王台より身を投ず。まさに老人の語るとおり。」

「それは何ですか？」

「白き牡鹿に纏わる伝説さ。願い虚しく、王も国も短命でこの世を去ったって話さ。それ以来、“白き牡鹿現る時、新しき国興る”とも言われるようになった。」

「それでは、暁は滅ぶのでしょうか。」

「さあな。もつとも今の瑞王の治世が長く持つとは思えんし……。待てよ、白い牡鹿に導かれたんなら、暁を滅ぼすのは少年、案外お前かもしれないな。」

「滅多なことを口にしないでください。誰が聞いているか判りませんよ。」

「それもそうだ。お互い、この事は秘密にしておくか。」

「そうですね。ところで、私は許龍峨と言います。失礼ですがお名前をお伺いしても宜しいでしょうか。」

「俺の名前は管東洛。まあ、白い牡鹿の事は気にするな。昔の伝説さ。それよりもどうだ、一杯やらんか？」

どこからか酒の入った瓢箪を取り出し、自ら酒を飲むと許龍峨にも

差し出すのだった。

「それでは遠慮なく。頂きます。」

「おっ！顔に似合わず、なかなかイイ飲みっぷりじゃねえか。たいしたもんだ。」

そうして二人は、夜が明けるまで焚き火の前で過ごすのだった。

許龍峨は、いつの間にか眠ってしまったようだ。木々の隙間から差し込む朝日に目を覚ます。焚き火は既に消されていたが、未だに温かい所をみると管東洛が一晩中火を絶やさないうようにしていたのかもしれない。管東洛の方に目をやると、腕を組んで何やら考えているようだった。

「おはようございます。もしかして、そうやって一晩中起きていたんですか？」

「いや、さつき起きたところだ。龍峨、お前はこれからどうする？」「私は一度、家に帰ろうと思います。父も母も私が帰らなかつたので心配しているといけませんし。」

「そうか。確か栄邑だったな。それだったら、ここからまっすぐ歩いていけば山道に出られるはずだ。後はその道伝いに歩いて行けば到着する。俺はこれから錦香に向かおうと思う。」

「そうですか。色々ありがとうございます。」

管東洛にお礼を述べると、栄邑に向けて旅立つ許龍峨であった。

「白き牡鹿現る時、新しき国興る。龍の許に黎明はもたらされん・・か。」

## 第2話

牡鹿を追いかけていた時は山の中を何時間も歩いたように思っていたのだが、管東洛の言われたとおり進んでいくと、しばらく行かないうちに山道に出た。後は道伝いに歩いて行けば栄邑に到着するはずである。こうしてみると、牡鹿の跡をつけて森の中を彷徨っていただけで、実際は街からそれ程離れていなかったのかもしれない。そう思い、許龍峨がしばらく歩いていると、向こうから誰かが馬に乗って駆けてくるのが見えた。地面を伝わってくる音からすると随分先を急いでいる様子である。許龍峨は、進行の妨げにならぬよう脇へと避けた。

砂塵を舞わせながら、目の前を黒毛の駿馬が駆け抜けていった。馬上に目をやると、白い着物を着た少女の姿があった。一瞬の出来事ではあったが、許龍峨の見たところ、少女は自分と同じくらいの年頃のようにだった。

「早く帰らないとみんな心配しているだろうな。それにしても、一体誰だろう？こんなに急いで。」  
そんな疑問を残したまま、馬と少女は遙か彼方へと遠ざかり、既に姿を消してしまった。しかし余程慌てていたのだろう、少女が通り過ぎた跡には白い佩玉（玉製の装身具）が残されていた。中央の鳳凰を囲むように二匹の龍の装飾が施された見事なつくりであったが、長らく手入れをされていなかったのか、すっかり薄汚れて本来の輝きは失われていた。それに加え、落ちた衝撃のためだろうか、所々欠け落ちた箇所があり、既に佩玉としての価値は無くなっていた。

「この佩玉を持っていれば、彼女の素性も分かるかもしれない……」  
そう思い、佩玉を手にとると大切に懐にしまうのだった。

しばらくして、少女が現れたのと同じ方角から別の馬の蹄の音が聞

こえてきた。まだ姿が見えぬうちから身体に地響きが伝わってくる。集団で馬を駆けているのだろう、ここからでも濛々と砂埃が巻き上がっているのが目に入った。余計なまき添いを食わぬようと、山道から外れて木の陰に身を潜めて様子を伺う。

やがて騎馬の一団が現れた。先頭を走っていた男が、許龍峨の目の前まで来ると手を上げる。それを合図に後続の者も馬を止める。全員が革の鎧に身を包み、十分に統制が取れているところから見ても、ただの山賊や物盗りの類ではなさそうだ。その中から一人の男が進み出ると、地面に屈みこんで蹄の跡を確認し始めた。

「これは最近つけられた跡のようです。乗り手が少女である事も考え合わせると、まず間違いないかと。もっとも、あの名馬不影が相手ですから追いつけるかどうか……。」

「くそつ、子供と思つて甘く見ておつたわ。あの白鳳双龍佩が、誰かの手に渡つたら……。」

「誰が聞いておるか分かんのに、余計な無駄口は叩くな！この事が外に漏れてみる。我々もタダでは済まんのだぞ。おい、いつまでそうやってる。」

「……はっ、申し訳ありません。」

「不影といえども、操るのは子供。まだそう遠くまではいつておるまい。先を急ぐぞ！」

そう言うと、再び馬を走らせて立ち去るのであった。

許龍峨は一団が走り去つたのを確認すると、ほっと胸を撫で下ろすのだつた。一瞬ではあつたが、地面に屈みこんでいた男がこちらに視線を送つたような気がしたからだ。先ほど拾つた佩玉を懐から取り出す。

「もしかして、これが白鳳双龍佩なんだろうか。どうしたものか……。」

山道には無数の蹄の跡と、何かを足で消したような跡だけが残されていた。

栄邑は街とは名ばかりの小さな集落であった。中央を流れる川に沿って家屋が立ち並び、住民の多くは農業を生業としていた。許龍峨の父である許尤施は、若くして学問を修め官吏の職についていたのだが、今は郷里に戻り畑を耕して暮らしていた。

「龍峨、昨日はどうしたんだい？心配したよ。」

「遅くなってすみません、父上。森の中で迷っていたものですから。」

「しばらくそこで待っていてくれないか。もう少しで終わるから。」  
許尤施は畑仕事を一段落させると、こちらにやって来る。許龍峨は昨日からの出来事を話して聞かせるのであった。

「森の中で管東洛と名乗る方と出会い、お世話になりました。」

「ほう、それは珍しい方と出会えたね。良かったじゃないか。」

「父上もご存知の方なのですか？」

「実際にお会いした事はないけれど、凄腕の占師と評判の人物だよ。先王が崩御されるのを予言したって事で華都を追われたというもっぱらの噂だけだね。」

「その方に私の将来について指摘されたのです。ただ、それが少し気になる内容だったので……。」

「何を言われたのかは、この際聞かないでおこうか。お前の将来にどんな事が待っているのか、知らないほうが私も楽しみだしね。」

そう言って笑う許尤施だった。管東洛との約束もあったので、許龍峨もそれ以上口にはしなかった。

「ところで父上、これを見ていただいて良いですか。」  
懐から佩玉を取り出すと、許尤施に見せる。

「白凰双龍佩と呼ぶらしいのですが、何かご存知ですか？」

許龍峨から佩玉を受け取ると、手にとって眺めるのだった。

「これは見事な装飾だね。しかし、白凰双龍佩というのは今まで聞いた事がないな。一体何処で手に入れたんだい？」

「山道で見知らぬ少女が落として行つたんです。不影と呼ばれる黒い馬に乗っていました。」

「そうか。馬の事なら私よりも載風の方が詳しいだろうから、彼に聞いてみるといいかもしれないよ。ちょうど今、街に戻ってきているから。」

「分かりました。それじゃあ、ちよつと挨拶してきます。夕飯までには戻りますので。」

そう言つて、許尤施と分かれて載風と呼ばれる人物を探し始める許龍峨であつた。

栄邑の街を流れる川沿いに、街で唯一の酒家があつた。店の中には陽がまだ高いというのに、大勢の客が席に座っている。その中で一人、弁舌を振るっている人物がいた。

「今、華都で持ちきりの話題が何かご存知か？あの天眼通の管東洛が、自らの予言が原因で都を追われたつて話なのだが。」

「それがどうした。管東洛が先王の死を予言したつて話だろ。早耳の者なら既に聞き知つておるわ。さすがの天眼通でも、まさか自分の発言で都を追われる事になるつとは思ひもよらなかつただろうよ。」

「話題になつているのは彼が追放された事ではないぞ！そんな話をわざわざするために皆に集まつてもらつた訳じゃない。話題になつているのは、彼が予言したその内容の方だというのだ。“微王が亡くなられる”ではなく、“微王が殺される”と予言したそうだ。」

「それじゃあ何か、微王は誰かに暗殺されたつて事か？」

「いや、なに。あくまでも噂に過ぎんが……。そうなつてくると色々と事情が複雑になつてくるつて訳だ。こうなると世も末だな。」

「お話中のところすみません、許龍峨です。」

「おお龍峨、久しぶりだな。元気にしていたか？しかし、よくここ

が分かったな。」

「ええ。栄邑の酒徒と呼ばれる張載風を探すのに、ここより他にどこを探すと言うのです。」

先ほどから酒家で弁舌を振るっていたこの人物。これこそ許龍峨が探していた張載風その人だった。

### 第3話

「栄邑の酒徒」と呼ばれる張載風という男。その呼び名のとおり無類の酒好きで知られた男であった。元々は薬売りを生業としており、各地を巡り歩いては自ら開発した薬を販売していた。その名を『至心丹』と言う。これが恐ろしくよく効くと評判の薬らしい。噂が噂を呼んで、“災いを防ぎ、四神の恵が宿る薬”として『災封四神丹』と称されるようになっていた。

ある時、そんな噂を聞いた許龍峨が張載風に『至心丹』の成分について聞いてみた事があった。

「載風兄さん。『至心丹』があれ程よく効くのは、何か秘伝の調合があるんでしょうね。」

許龍峨の問いに対して、張載風から戻ってきたのは意外な答えだった。

「『至心丹』なんて、単に小麦粉を丸めただけの代物さ。龍峨、お前でも作れるぞ。」

それでは詐欺ではないかと許龍峨が尋ねると、張載風はこう答えるのだった。

「薬なんかに頼らなくても、人間には本来“自然治癒力”ってものが備わっているんだ。俺は薬を与える時に、それを引き出す手助けをしてやっている。ただ、人間ってものは目に見えないものには代金を払いたがらない。そこで、薬という目に見える形を与えてやっている訳さ。」

実際のところ、『至心丹』の成分が張載風の言うとおり小麦粉を丸めた物かどうかは不明であった。何しろこの張載風、先ほどから酒家で熱弁を振るっていたのでも分かるとおり、やたらと口が立つ男なのである。おまけに無類の酒好きで、昼でも夜でも酔っ払っている姿がよく目撃される。こんな男の言うことなので、どこまでが本当でどこまでが冗談なのか、許龍峨でなくても分かったものでは

ない。一つだけ確かに言えることは、張載風は今まで人に慕われる事はあつても、恨まれた事は無かつたので、薬の真贋はともかくとして、その存在が大いに役に立っている可能性は否定出来ない。そんな彼の周りには自然に人が集まるようになり、『至心丹』は益々名薬としての評判を高めていくのであつた。

「載風兄さん、少しお尋ねしたいことがあるのですが。」

「何だ、改まつて。俺に判ることなら何でも聞いてくれ！」

「兄さんは、不影という名の黒毛の馬をご存知ですか。有名な駿馬のようなのですが。」

「不影だと！龍峨、まさか孟家と何かあつたのか？悪いことは言わん、あそことは係わり合いにならない方が身のためだぞ。」

「私はただ、不影と呼ばれている馬を見かけただけで、孟家とは何の係わりもありませんよ。それに孟家がどうかしましたか？」

「そうか、それなら良いんだ。不影というのは、孟家の当主である孟宗徳の愛馬で、お前が言うように駿足で知られた名馬だ。ところで、さつき不影を見かけたって言っていたな。こんな場所に孟宗徳が現れるはずは無いんだが、一体どこで見かけたんだ？」

「実のところ、その馬が果たして不影なのかどうかも分かりません。」

「何だそりゃ？ますますもって訳が分からん。」

「実は、不影と呼ばれている黒毛の馬を山の中で見たのです。もつとも、見たといつても一瞬の出来事だったので……。それに、馬を操っていたのは私と同じくらいの年頃の白い服を着た少女で、男性ではありませんでしたよ。きつと、孟家にゆかりの方なのでしようね。」

「お前と同じくらい年の少女が不影に乗っていた？はて、孟宗徳には娘などいないはずだが……。そもそも、不影に乗れるのは当主である孟宗徳ただ一人だけだ。他の者は馬に近づくことすら許されておらん。例えば家族であつてもな。唯一の例外は、不影を生ま

れた時から育ててきた孫丘楊という男だけだ。そいつに不影の世話は全て任されているという話だ。」

「そうですか……。それで彼女は追われていたんだな。」

「追われていた？その不影に乗っていた少女の事か？」

「ええ。私那不影の名前を知ったのも、彼女を追っていた連中が話しているのを聞いたからなのです。」

そう言つて、張載風に皮の鎧に身を包んだ騎馬の一団について説明をした。

「それはきつと、孟家の私兵だな。龍峨、奴等にお前の姿を見られたか？」

「いえ、余計な面倒に巻き込まれないようにと木の陰に隠れていました。」

「そうか、それなら問題ないだろう。ともかく、この件にはこれ以上深く係わらないほうがいい。何と言つても相手は孟家だからな。」

そう言つと、張載風はそれ以上何も答えてくれなかった。

孟家は元々北国の出身であり、戦禍を逃れて暁にやってきた一族であつた。彼らが住んでいた国は寒冷な土地柄のため農作物は収穫できなかつたが、代わりに良馬の産地として有名な所だつた。暁に移り住んでからもその時の人脈と経験を生かして馬商となつた孟家は見事に成功を収め、この国でも屈指の豪商となつていた。また、孟家は金さえ用意すればどんな相手とでも取引をするというので、巷では「名馬欲しけりや金を積み。名薬欲しけりや酒を酌め。」と歌われるようになっていた。もちろんここで言う“酒を酌め”は張載風の事を指しているのは言つまでもない。

こうして築いた基盤を元に現当主の孟宗徳が海上交易を始めると、孟家の地位は益々確固たるものとなつていった。その一方で、海上交易と称して孟家の船団が私掠行為を行っているという噂もあつたのだが、持ち前の財力を使い王の側近や官吏の者と通じていたため、証拠不十分のまま司直の手を逃れていた。今では朝廷に対しても絶

大なる影響力を有するまでに成長を遂げた孟家は、この国の四大名家の一つに数えられるほどだった。

また、孟家には私設軍団が組織されており、齒向かう者には手段を選ばず報復をするという一面も併せ持っていた。日頃から怪しげな者達が多く出入りしており、張載風が許龍峨に係わり合いになるなど忠告したのも、そういった事情があつての事だった。

張載風と分かれて家へと戻つた許龍峨は、今日あつた出来事を自分なりに整理してみた。

(彼女を追いかけていたあの集団は、孟家の手の者と考えてまず間違いない。そうすると、山道で出会つた少女は孟家から白鳳双龍佩を盗み出し、不影に乗って逃走を凶つたのであろう。少女が誰なのか、何の目的で佩玉を盗み出したのかは不明だけれど、この白鳳双龍佩には何か秘密が隠されているに違いない。)

そう想い、白鳳双龍佩をどこか安全な場所に隠すことにするのだった。

許龍峨の家は川に張り出すように建つていた。木の杭の上に板を載せた作りの床板は、1枚はぐるとその下には川が流れているのが確認できた。そこで白鳳双龍佩を油紙で何重にも包み、その上を更に半端布で覆い、杭の一つに縛り付けておいた。

(ここなら誰にも分らないだろう。)

ちよつと隠し終わつた時に、許尤施が帰つてきたようだった。

「龍峨、載風とは出会えたかい？」

「はい、父上。酒家で熱弁をふるっていました。相変わらず元気そうでしたよ。」

「そうかい。『至心丹』はすごい効能らしいからね。私も今度一つ貰つておこうかな。」

「ところで、先王が暗殺されたというのは本当なのでしょうか。」

「載風が話しているのを聞いたんだね。載風と天眼通の二人を知っているお前としては、この噂をどう思う？」

「分かりません。載風兄さんは、口は上手いですが嘘を吐くような人じゃないし、管東洛殿も一度お会いしただけですが、そんなに悪い方には思えませんでした。」

「それじゃあ、噂は本当なのかもしれないね。現に微王は亡くなられ、瑞王が国を治めている事だし。」

「しかし、人間の力で将来の事を見通す事など、本当に出来るのでしょうか。それが可能であれば管東洛殿は、みすみす自らを窮地に追いやった事にもなります。本当に将来の事を見通す事が出来るのなら、そんな行動を取る必要はないと思います。」

「それじゃあ、やっぱり単なる噂なのかもしれないね。微王が若くして亡くなられたのは偶然の出来事で、そこには何も不自然な点はなかったという事になる。」

「父上、意地悪しないで教えてくださいよ。」

「いいかい、龍峨。先ほどお前は“管東洛は自らを窮地に追いやった”と言ったね。どうしてそう思ったんだい？」

「自らが口にした予言のせいで都を追われたからです。そんな事をしなければ彼は都を追われることはなかったはずですから。」

「そうだね。ところで、都を追われたことが管東洛にとって不幸な出来事だったとお前は考えているようだけど、私はそうは思わない。何しろ私自身、今ではこうして都を離れて畑仕事をしているからね。」

「父上、……すみませんそう言うつもりではなかったのです。」

「龍峨、私が“微王は暗殺された”と言ったからといって、それをそのまま信じてはいけない。逆もまたしかりだ。物事の本質は自分で見定め、考え、判断するんだ。管東洛は評判通りの人物かもしれない。しかし、だからと言って、彼の言葉がいつも正しいとは限らない。それだけはしっかり覚えておきなさい。」

何となく許尤施に上手く言いくるめられた気もする許龍峨。父親と張載風のどちらが口が立つのだろうか、是非とも一度、両者が競い合う場面を見てみたい気もするのだった。

「ん？どうかしたかい、龍峨。」

「いいえ、何でもありません。」

「そうか、じゃあ夕飯にしようかね。」

先ほどの真剣な表情とは一変して、そう告げる許尤施であった。

## 第4話

次の日の朝早く、話し声で目を覚ました許龍峨。こんなに朝早くから客が来るなんて珍しい出来事だと思いつながらも、一体誰だろうと覗いてみると、部屋の中には許尤施と張載風の姿があつた。二人は机を挟んで向かい合つて座っており、それぞれの前にはお茶が置いてあつた。さすがの張載風も、今日はまだ酒を飲んではないよつだつた。

許龍峨に気がついた二人は会話を中断すると、こちらを向いた。

「やあ、おはよう。どうやら起こしてしまつたようだね。」

「悪いな、龍峨。朝から邪魔してしまつて。」

「父上、おはようございます。載風兄さんも。今日は早いですね。」

「一体どうしたんです？」

「これから錦香に向けて出発しようと思つてな、尤施殿に出立の挨拶に来たわけだ。」

「錦香ですか。そう言えば管東洛殿も錦香に向かつて言つていましたが、一体どんなところなのですか？」

許龍峨のこの発言に、許尤施と張載風がお互いに顔を見合わせる。

「何だ、龍峨。お前、錦香に行った事がないのか？」

そう聞いてきたのは、張載風であつた。

「はい。産まれてから、栄色の街を離れたことがないので……。」

「そうか、それじゃあお前もついてくるか？ 一人、荷物持ちが欲しいと思つていたんだ。」「それはいいね。是非連れて行つてもらいなさい、龍峨。」

許尤施も異存はないようだ。

「しかし、父上。畑仕事とか家の事とか、色々ありますし……。」

「そう言つて、一晩中山を彷徨つていて家を留守にしていたのは誰だつたかな？ それに、私の事は気にしなくてもいいよ。外の世界を見て周りのもいい経験になるだろうし、載風と一緒になら安心だ。」

「よし、そうと決まったら祝杯をあげるぞ。龍峨、ひと足先に酒家に行つて場所を取つておいてくれ。頼んだぞ！」

「・・・“嫌です”つて選択肢はないんですよ、きつと。」

「そこまで分かっているなら、ほら早く行かんかい！」

張載風に追い立てられるようにして家を飛び出した許龍峨であったが、内心では初めて栄邑の街の外に出られる事が嬉しくて仕方がなかった。

「・・・こんな感じで良かったんですかね。」

「申し訳ないね、載風。君まで巻き込んでしまつて。」

「近いうちに行こうと思つていましたから構いませんよ。それにしても一体どうしたんです、急に。」

「ちよつと気になる事があつてね。私の思い過ごしならいいんだが・・・。」

「例の白凰双龍佩ですか。俺としては、そんな古臭い玉佩よりも孟家の方が気になりますかね。」

「孟宗徳は滅多な事では表に出てこないから大丈夫だよ。」

「そんなもんですかね。」

「ところで載風。これは少ないんだが、旅の路銀にでも使つてくれないか。こんな時代だからね、何かと必要になる事もあるだろう。」  
そう言うと、部屋の奥から布に包まれた金子きんすを取り出して張載風に手渡そうとした。

「尤施殿、私の通り名はご存知ですよね。それに、こう見えても金には困つていませんよ。」

「・・・そうだったね。よし、龍峨も待つていることだろうから、我々もそろそろ祝杯を挙げに行こうか！今日はしっかり注がせてもらうよ。」

「それじゃあ行きましょうか！」

こうして急遽、栄邑の酒家にて盛大な送別会が催される事となった。朝早くから叩き起こされた酒家の亭主は一瞬不機嫌な顔をして

いたのであるが、客が「栄邑の酒徒」と知るや、一変して愛想良くなるのであった。もちろん、張載風の気前の良さを知っていたからである。

「亭主、今日はここにいる許龍峨の門出の日だからな、盛大に頼むぞ。」

この一言に亭主の眼の色が変わったのは言うまでもない。店の奥からは次から次へと酒と料理が運ばれて、三人の目の前の机をみるみる埋め尽くしていくのだった。

「龍峨、今日はお前のお祝いだからな、好きなものを頼んで良いぞ。これから先は長旅になる。ここでしっかり栄養をつけておけよ。」

「そうだよ、龍峨。遠慮はいらないから今日はお前の欲しいものを頼みなさい。錦香に着くまでは色々大変だからね。」

「ありがとう、載風兄さん、父上。」

「それにしても魚料理がないな。おい亭主、魚は無いのか？」

「旦那、申し訳ありません。今朝はまだ、仕入れてきておりませんで……。」

「じゃあ悪いんだが、これで買って来てくれないか。釣りはお前にやるから、出来るだけ生きの良いのを見繕ってきてくれ。」

「分かりました。すぐに戻ってきますんで、帰らず待っていてくださいよ。」

喜び勇んで店を後にした亭主。箆を手にしばらく川沿いに歩いていると、橋の袂で老人が釣りをしているのに出会った。白い着物に瓢箪を腰にぶら提げた老人だったが、この辺りでは見かけない顔だった。

（この爺さんから買ったほうが安く上がりそうだな。）

そう考えた亭主は、老人に声を掛けてみることにした。

「爺さん。何か釣った魚があれば、少し分けてもらえないかな。急なお客でね。」

「嫌じゃ。僕は自分が気に入った相手にしか魚をやらん主義でな。」

お主にやるわけにはいかん。」

そう言つて、腰にぶら提げていた瓢箪に口を付けて飲み始めるのだつた。

亭主が老人の側に置いてあつた籠を覗いてみると、中にはたくさん魚が入つていた。

「こんなにあつても一人じゃ食べきれないだろ。お礼はずむから分けてくれないか？」

「儂の釣つた魚をどうしようと思つた勝手じゃ。魚が欲しけりや自分で釣ればいい。」

「頼むよ、爺さん。大事な客なんだ。栄邑酒徒の張載風だろ。それに許尤施と龍峨親子。」

「おい、亭主。今、龍峨と言つたか。」

「そうだよ、“許龍峨”。許尤施の息子さ。今、うちの店にいるよ。」

「・・・そうか。」  
それだけ言つと、老人は自らの籠に入つた魚を亭主の籠に移し変えてこつた。

「この鯉だけは儂に残しておいてくれ。それ以外はくれてやる。お代もいらん。」

老人の籠の中には見事な鯉が一匹残つていた。

（まあ、これだけあれば十分だろう。釣つたばかりだから生きも良いし、儲けたわい。）

「助かつたよ、爺さん。今度、うちの店に来るときは声をかけてくれ。何か御馳走するからさ。」

「用が済んだのなら、さつさと何処かへ行け。うるさくて魚が逃げるわ。」

魚が手に入つた亭主は、喜び勇んで酒家に戻るのがたつた。

## 第5話

翌日、旅立ちの準備を整えた許龍峨と張載風は、許尤施に見送られて出立するところであつた。

「父上、それでは行ってまいります。どうかくれぐれもお体にはお気をつけ下さい。」

「なに、私の事は心配いらぬよ。それよりも、載風の言いつけをしつかり守つて行動するんだよ。旅の途中ではどんな事が起きるか分らないからね。」

「はい、分りました。」

「それでは、出発するか。では尤施殿、行って参ります。」

こうして許龍峨と張載風の二人旅が始まつた。街外れまで到着したとき、許龍峨が後ろを振り返つてみると、はるか遠くに自分が今まで暮らしてきた栄邑の街が広がっていた。

「おい、龍峨。早くも里心がついて栄邑の街が懐かしくなつたんじゃないだろうな？まだ少ししか来てないんだぜ。そんな事じゃあ、先が思いやられるぜ。」

「そんなのじゃありませんよ。ただ、しばらく栄邑の街ともお別れだから、この光景を記憶に焼き付けておこうと思つただけですよ。」

「お前もいつかは官吏になるために栄邑の街を離れるつもりだったんだろ？遅いか早いかの違いだけじゃないか。何をそんな感傷に浸る必要があるんだ。」

「載風兄さんは、どうして私が官吏になりたいと思つのです？」

「そりゃ決まつているだろう。天下の許尤施の息子だぜ。官吏以外に何になるっていうんだ。親父さんもそのつもりで日頃からお前に勉強を教えていたんじゃないのか？まあ俺みたいに薬屋になるっていうのも悪くはないと思うが。」

「もし、そうなら『災封四神丹』ではなくて『龍臥四神丹』として売り出しますね。より高名になるように。」

「売上げが上昇しそうな名前だな。せいぜいお前に職を奪われないように、頑張るとするよ。しかし何だな、その名前だと風邪を招きそうだな。」

そんな軽口をたたく張載風に調子を併せていた許龍峨であったが、突如立ち止まるのだった。

「どうした龍峨。お腹の調子でも悪いのか。」

「載風兄さん、この際だから一つ教えてもらっても良いですか？」

「何だ、改まって。『至心丹』の作り方なら前にも教えてやったはずだが。」

「そうじゃないんです。父上の事なんです、どうしても都を追われたのでしょうか？何か知っているんでしょう？私にも教えてください。」

前を歩いていた張載風が立ち止まり、許龍峨の方を振り向く。

「尤施殿からは何も聞いていないんだな。」

「はい。父上は栄邑に来る以前の事はあまり話したがらないのです。母上为荣邑で私を生んで亡くなった事だけは教えてくれましたが……。」

「そうか。それなら、お前の父上がどうしても都を追われたのかは、俺の口からは言えない。ただし、お前の父上がこの国で最も優れた忠臣であった事だけは間違いない。お前はそれを誇りに思って良いんだぞ。」

「……そうですか。」

「代わりに、別の男の話をしてやろう。昔の話だが、朝廷に関才雲という官吏がいた。優秀な男だったんだが、愛想が悪い上に口下手で酒を一滴も飲まなかったんだ。」

「酒を一滴も飲まないなんて、載風兄さんとはまったく正反対な人物ですね。」

「そうだろうか？関才雲が酒を飲まなかったのには、ある理由があったからなんだ。父親も官吏だったんだが、ある酒宴の席での失態からその職を追われたんだ。酒を飲みすぎて饒舌になり、余計な事を

喋ってしまったんだな。それ以来、関才雲は同じ失態を繰り返さないように、酒を一滴も飲まなかったんだ。」

「でも、酒宴の席でお酒を一滴も飲まないのは、失礼に当たるのではないでしょうか。」

「だから、普段は酒を飲んでる振りをしていたんだ。ところが、日頃から関才雲の事を快く思っていない者がそれに気がついてな、こう言ったんだ。“関才雲殿におかれては、どんな時でも泥酔された姿を拝見した事が御座いませんな。是非とも貴君にあやかりたいと常日頃より思っております。つきましては、我々全員と杯を交わして頂きたいのですが、いかがですか。”とな。その男は関才雲よりも位が高かったのだが、無能な男でな。いつか自分の地位を脅かす存在になるであろう関才雲をこの機会に失脚させようと画策した訳だ。たとえ相手が無能な輩でも、自分よりも偉い事には代わりはない。関才雲はやむを得ず、その言葉通りその場にいた全員と杯を交わす事になったんだ。」

「関才雲はどうなったんでしょか。今まで酒を一滴も飲んでいなかったのですよね。」

「ああ。しかし見事、飲み干したそうさ。元々酒が飲めない訳じゃなかったらしい。」

「それは良かったですね。」

「だがな、それを見た先ほどの男が更にこう言ったんだ。“さすがに酒宴で失態は犯せないと見える。随分と鍛錬を積まれたのでしょうな。”とな。」

「それは暗に、父親の失態を指している訳ですね。なんて嫌なヤツだ。」

「そうさ。当然、関才雲は激怒した。やはり自らも父親同様、これで職を辞する事になるのかと。そう覚悟して席を立とうとした時、傍らに座っていた人物が立ち上がった。こう言ったそうさ。“古代の英雄の多くは同時に酒豪でもあったと聞きます。私のような凡人が鍛錬したところで、果たして彼らの才能に及ぶ事が出来るものでし

「ようか。」そしてこう続けた。「おつと失礼、どうやら今宵は少々酔ってしまったようです。どうやら私のような凡人が鍛錬を重ねても英雄には及ばないようです。しかしながら、関殿。ここから先は拙宅にご足労いただき、この凡人にもご指導を賜りたくお願いいたします。それでは皆様、お先に失礼いたします。」そう言つて、二人で宴席を辞したそうだ。」

「つまりは関才雲を古代の英雄に喩えて、天性の才能を称えたという事でしょうか。でも、それって褒めすぎなんじゃないですか？」

「どうしてだ？」

「だって、関才雲つて載風兄さんの事でしょ。違いますか？」

「この世の中に、“栄邑の酒徒”を措いてほかにそんな酒豪、私は知りませんからね。」

「まあ、いいだろう。そういう事にしておけ。ともかく、この一件があつてからというもの関才雲は朝廷内でも一目置かれる存在となつた。今までの働きもようやく認められて、見事に昇進が叶つたそうだ。また、その人物に聞くところによると、関才雲の父親が職を追われたのは酒宴での失態によるものではなかつたらしい。」

「一体なんだつたのですか？」

「王が酒宴を催した際に、遅れてきた彼の父親が杯の酒を捨ててしまったそうだ。その行為を非難した王に対し、彼の父親は“この国が置かれている現状をご存知であるならば、何故このような酒宴を催して祝う事が御座いまいしょうか？”と諫言をしたそうだ。それが王の逆鱗に触れて、彼の父親は職を解かれたというのが真相らしい。」

「そうだったんですね。ところで、その人物つて誰なんですか？」

「お前の良く知っている人物だ。」

「・・・もしかして、父上ですか？」

「そう言う事だ。こんな話は尤施殿にとっては他愛の無い出来事だろうがな。それでも関才雲は大いに恩義を感じたそうだ。話はこれ

で済みいだ。」

「まだ、関才雲が官吏を辞めた話が残っていますよ。どうして官吏を辞めたんですか？」

「関才雲のその後の消息は俺にも分らん。もしも誰かから聞いたら教えてやる。」

「それじゃあ、いつか話してくださいね。別に今じゃなくてもいいので。」

「そんな約束は出来んぞ！俺は関才雲じゃない、張載風だからな。」

「いいですよ。いつでも。じゃあ、先を急ぎますか、才雲……じやなかつた、載風兄さん！」

二人の旅はまだ始まったばかりなのだった。

## 第6話

栄邑の街から錦香まで行くには、途中険しい山道を越えなければならぬ。特段先を急ぐ必要もなかったので、二人は徒歩にて旅をしていた。・・・と言うのは表向きの話で、実際のところは、普段から酒が手放せない張載風が酩酊した状態で騎乗し、落馬した場合を慮った結果として徒歩を選んだのだった。

当の本人は今までに酩酊した事など一度も無いと嘯いており、それは許尤施も認めるところではあったのだが、一緒に旅する許龍峨としてはそれをそのまま鵜呑みには出来なかった。一度栄邑の街を離れてしまえば、お互いだけを頼りにしなければならぬのだから「さて、龍峨。とりあえずこうして二人で旅に出ることになった。

お前は初めて旅に出るんだから、これからは俺の言う事をきちんと聞いて余計な面倒を起こすんじゃないぞ！」

「載風兄さんこそ、お酒を飲みすぎないでくださいね。“酒入れれば舌出ず”って言いますし。」

「ほほお、尤施殿から教わったのか。栄邑の酒徒にとってみれば、そんな言葉なんぞ丸めてポイツだ。それにな“酒は白薬の長、嘉會かかいの好なり”ってな。」

「それを言うなら“百薬”じゃないんですか？」

「分つてないな。いくら酒でも『至心丹』には劣るだろ？だから“白薬”なんじゃないか。百から一を引いたら白だろ？」

「兄さんの為を思つて言っているのに・・・ちよつとは真面目に聞いてくださいよ！」

「まるで俺の嫁にでもなつたみたいなお振りだな。そういうヤツは一人いれば十分だ。」

「へ。ふん。そうなんだ。」

そう言うと、張載風の顔をジロジロと見つめ始める許龍峨。

「なんだ、気持ちの悪い。変な声を出すな！」

「いや、てつきり載風兄さんってそういう事にはあまり縁が無いのとばかり・・・意外にやる事はやっているんだなあと思って。」  
「別にそういう訳じゃないんだが・・・まああれだ、そういう口うるさいヤツがいるって事だ。そんな事よりお前の方はどうなんだよ！」

張載風に尋ねられ、許龍峨の脳裏には黒馬に跨った少女の姿が浮かぶのだった。山道で落ちていた白凰双龍佩を拾った時は、単に善意でしたつもりでいたのだが、自らも気付かぬうちに少女との繋がりを見切れさせまいとする思いがあつたのかもしれない。

（何であの娘の姿を思い浮かべたんだろう。孟家から白凰双龍佩を盗んで不影で逃亡しているところを、一瞬擦れ違っただけの見ず知らずの少女なのに。）

「へへ。ふん。そうなんだ。」

今度は先ほどの仕返しとばかりに、許龍峨の顔をジロジロと見つめ始める張載風。

「お前の方こそ、やる事はやっているじゃないか。隅におけないなしかし、栄邑にそんな年頃の娘なんていたか？」

「そういうんじゃないよ、ちょっと気になった娘がいるだけですよ・・・おや、あそこに店があるみたいですね。ちようど良かった、ちょっと休憩していきましよう！」

「話を逸らしたつもりだろうが、まあ良い。あの店にもどんな“薬”が置いてあるか分らないからな。薬作りは日々の研鑽が物言うんだ。それじゃあ先に行っているぞ！」

まるで天命に導かれるかのように、辿り着くべき場所に辿り着く事になりそうだ。

（載風兄さんを関才雲と思ったのは、やっぱり勘違いだったんだな）  
「ちょっと、待ってくださいよ。もう、余計な面倒だけは起こさないでくださいよ！」

そう言いながら先を走る張載風の後を追いかけていくのだった。

許龍峨が店に着いた時には張載風は既に席を取っており、こちらに向かつて手招きしていた。店内は綺麗に掃除が行き届き、備えられた机や椅子も磨き上げられていたので、旅の疲れを癒すには最適の場所であった。街道沿いに他の店が無いため、旅行く人々はここで足を留めることだろう。そう考えると、かなり儲かっているのかもしれない。

許龍峨が到着するのを奥から見ていたかのように、店主が現れた。「オヤジ、とりあえず・・・」  
「お茶と饅頭を二人前お願いします。まだ陽が高いですから、良いですね？」

張載風の意図を察した許龍峨が、先に別の物を注文してしまった。言外の意味は改めて確認するまでも無い。恨めしそうに許龍峨の方を向きながらもひとまずは引き下がった様子の張載風。しかし、油断は出来ない。

「ところで、前からこんな場所に店なんてあつたか？おい、オヤジ。聞いているのか？」

「・・・はい、すみません。お茶と饅頭を二人前でしたね。すぐに持ってきます。」

店主の様子に不自然なところはあつたが、しばらくしないうちにお茶が運ばれてきた。

「と、とりあえずお茶です。饅頭は今、蒸しておりますので後ほどお持ちいたします。」

「どうしたオヤジ、体が震えているぞ。体調でも悪いんじゃないか？」

「な、なんでもありませんよ。ちょ、ちょっと風邪をこじらせています・・・。」

机の上に二人分の湯飲みを並べお茶を注ごうとするが、手元が震えてお茶を零してしまった。机から零れたお茶は、地面に滴り落ちて

いく。

「も、申し訳ありません。すぐに布巾を用意しますのです。」

「もういいですよ。後は勝手にこちらでやりますので、奥で休んでいてください。」

「顔色も悪いし、すごい汗だ。相当ひどい風邪みたいだな。これでも飲んでおけ。」

張載風は荷物の中から『至心丹』を取り出すと、店主に手渡した。店主は礼を言つて薬を受け取ると、奥へと引き下がっていった。

「さあ、さあ。不貞腐れていないで、お茶でも飲みましようよ。」

「お茶なんか馬鹿らしくて飲んでいられるか！こうなったらやけ食いだ。饅頭はまだか？」

しばらくするうちに、店の奥から饅頭の良い匂いが漂ってきた。

それにつられるかのように野良犬が一匹、店の前にやって来ていた。

「あら、今日は珍しくイイ男が来ているじゃない？それも二人も。」

先ほどの店主とは違い、店の奥から姿を現したのは妖艶な雰囲気を持つ女だった。こんな店にはそぐわない煌びやかな衣装を纏い、微かに白粉の匂いがした。出来たての饅頭を載せた皿を手持しているところからすると、この店の者なのだろう。

## 第7話

「姐さん、この店の人がい？それにしては随分と色っぽいな。おまけに絶世の美女ときた。」

女は皿を机に置くと、張載風の隣に座つて科を作り微笑むのだった。「あら、兄さん。口が上手いわね。こんな陽の高いうちから私を口説いてどうしようっていうんだい。ほら、お連れさんが見ているよ。」

突然自分に話を振られた許龍峨は、どういふ風に対応すれば良いのか分らず戸惑つていた。栄邑の街にいる女性の大半は畑仕事や家事手伝いをしている。そのためこんな風に着飾ったりする事は、年に1度行われる祭りの時だけだった。それも皆が出歩くようになるのは日が暮れてからの事である。許龍峨にとつて、こうして明るい時間に化粧を施した女性を見るのは初めての事であつた。

「かわいい坊やね、照れちゃつて。でも私の相手をしてもらうには、もう少し大人になってからじゃないと駄目ね。」

女と顔を合わせないように視線を下げる許龍峨だったが、白い肌が露わになるくらいに深く開いた襟元と衣服の上からでも分る膨らみに、目のやり場に困るのだった。そんな様子を見て取つた女が、意地悪くこう告げる。

「坊や、せつかくだから冷めないうちに食べてね。」

「えつと、何の事ですか？」

「いや〜ね。注文したお饅頭の事じゃない。他に何かあるっていうの？」

机の上に置かれた皿の上には、二人前の饅頭が置いてあつた。白くて柔らかかそうな饅頭からは湯気が立ち上り、良い香りがしていた。

「何だか、お腹がいつぱいで食べられそうにないです。載風兄さん、お先にどうぞ。」

先ほどからの許龍峨の様子に、好機到来とばかりに張載風が口を

開く。

「俺も何だかお腹がいっぱいでな、饅頭は包んでもらって旅の途中で食べる事にして・・・それにしても龍峨、折角こんな美女が隣にいるっていうの何か物足りない気がしないか？」

許龍峨とて張載風の魂胆が分からぬ訳ではない。こう切り替えした。

「花を愛でるのに酒は無用。そうは思いませんか、張載風殿。」

そんな二人のやりとりを聞いていた女だったが、さも驚いた表情で張載風の方を向く。

「お兄さん、もしかして“栄邑の酒徒”こと張載風かい。」

「嬉しいね。姐さんの様な美女に名前を知ってもらっているとは。」

張載風の答えに、女の瞳が怪しく輝いた。

「子供だって知っているよ。“名馬ほしけりや金を積み。名薬欲しけりや酒を酌め”ってね。こんな所で会えるなんて嬉しいよ。それにしても何だかって栄邑の酒徒がお茶なんか飲んでるんだい？」

「これには深い事情があつて、話せば長くなるんだが・・・。」

許龍峨の方を恨めしそうに向く張載風。つられて女も許龍峨の方に視線を移す。

「はいはい、分りましたよ。どうせ駄目って言っても聞かないんですよ。“栄邑の酒徒”殿。」

「悪いな、何か催促したみたいで。姐さん、そういう訳だから酒を頼む。」

その言葉とは裏腹に、張載風の表情には申し訳なさそうな様子は微塵もなかった。

注文を受けて女が席を外す。先ほどまで女が座っていた空間を見つめている許龍峨の鼻腔をくすぐるように、女が残していった残り香が微かに漂っていた。

「龍峨。いつまでそんな間抜け面しているつもりだ。そんなのじゃ将来、女で失敗するぞ。」

「そんな事・・・」

心の奥を見透かされたような言葉に、我に戻る許龍峨であった。そんな許龍峨をよそに、張載風の方は先ほどから湯飲みを手にして匂いを嗅いだり口の中を含んだりしている。

「何をしているんですか？」

「お茶には異常はないか。しかし、この饅頭は怪しいな。処分しておくか。」

おもむろに饅頭を手にとると、店の外に放り投げた。それを見た野良犬がその後を追う。

「龍峨、詳しく説明している暇はないから良く聞け。お前は今からその草むらに隠れて、これから何が起きても俺が良いというまでは絶対に出てくるなよ。理由は後で説明する。急いで隠れる。」

そう言うと、店からさほど離れていない場所にある草むらを指差した。そして、自らは懐から薬を取り出すと、机の上に置いてあるお茶の中に入れ始める。

張載風の突然の行動に驚きを隠せない許龍峨であったが、何か考えがあつての事と思ひ指示に従うことにした。

程なく、先ほどの女が酒を持って戻つて来た。隠れ場所からでも店の様子は手に取るように分り、二人の話し声も十分聞き取ることが出来る。

「あら？坊やの姿が見えないようだけど、一体どうしたんだい？」

「ああ、あいつは知り合いに頼まれて一緒に旅をしていたんだが、ガキの癖に“酒を飲むな”って口喧しい奴だったんだ。姐さんも薄々気が付いただろう？」

幸い、知り合いの家はここからそう遠くない。一人でも大丈夫だろうっていうんでここで別れたよ。これでまた独りで旅を続けられるって訳だ。」

「そうなのかい。邪魔者は消えたって事だね。ところで兄さん、机の上に置いてあつた饅頭が無くなっているようだけど、食べたのか

い？」

「あの饅頭はさっきのガキが全部持って行きやがったよ。父親と二人暮らしなんだが、家に持ち帰って食べる気らしい。まあ、俺は姐さんと酒さえあれば構わないんだが。」

張載風の言葉に内心の喜びを隠し切れない様子の女であったが、いそいそと酌を始める。

「どうした、随分嬉しそうな顔をしているじゃないか。」

「女は褒められれば嬉しいものよ。そんな事も知らない訳じゃないくせに、意地悪な兄さんだね。さあ、一息に空けておくれよ。」

杯を手にとって口をつけようとする張載風の隣で、女は固唾を呑んで見守っていた。

「そんなに見つめられたら、緊張して飲めないじゃないか。まさか、酒の中に毒でも入っているんじゃないだろうな？」

「まだ飲んでいないそばから酔っているのかい。可笑しな兄さんだね。」

妖艶に笑う女の姿に、張載風も笑いながら杯を干した。更に女が酒を満たす。

「ところで、亭主の方は大丈夫なのか。随分と顔色が悪かったようだが。」

「亭主？・・・ああ、嫌だよ、兄さん。あんなのが私の亭主なもんか。あいつは、借金の方に無理やり私をこの店に連れてきて働かせている悪人なのさ。」

「随分と穏やかじゃない話だな。それならこの店から逃げればいいじゃないか。」

「それがそう簡単にはいかないのさ。最近じゃあこの辺りも物騒だね、盗賊団が出るって噂なんだ。それに、女の身一つで旅をするなんて無茶は出来ないよ。」

まあ、あんな男の話はどうでもいいじゃないか。それよりもどんどん飲んでおくれ。」

女がしきりに酒を勧めてくるので、張載風も構わず杯を空けてい

く。

「俺ばかり一人で飲んでいてもつまらないから、姐さんも一杯どうだい？」

「私を酔わそうって魂胆なら、その手は通じないよ。代わりにお茶でも頂こうかしら。」

机の上に置いてあつた湯飲みに茶を満たしてそれを飲む。

「何だ、酒は嫌いなのか。それじゃあ一つ、賭けをやらないか。二人で飲み比べをするんだ。俺は酒で姐さんはお茶。姐さんが勝てば俺が借金を肩代わりしてやる。何だったら安全な場所まで連れて行ってやる。」

「私が負けたら、どうなるんだい？」

「俺の言う事は何でも聞いてもらう。どうだ？」

「他に客もない事だし、騙されたと思ってその話に乗ってあげるわ。」

こうして、草むらに隠れている許龍峨をよそに、張載風と女の飲み比べが始まるのだった。

## 第8話

飲み比べの方法は至って単純なものだった。まず張載風が杯の酒を空ける。続いて女が湯飲みの茶を干す。その繰り返しだ。どちらか先に飲めなくなった方の負けである。単純に考えれば茶を飲んでいる女の方が有利であるのは間違いない。

「兄さん、さつきから手元が震えているようだけど大丈夫かい？まだ勝負は始まったばかりだっていうのに、もう酔っ払ったんじゃないだろうね？しっかりおしよ。」

女が言うとおり、張載風の手にした杯からは酒が滴り落ちていた。許龍蛾が知る限り、こんなにも早く張載風が酔っ払う姿を見たことはない。

「なに、これくらいの酒で酔っ払った事なんて俺は今まで一度も無さ。もしも酔っているとしたら、きつと姐さんの色気に酔っているんだろうよ。」

妖艶な流し目を送る女の横で、張載風は手にした杯を一気に空けた。続けて女も茶を干した。しばらくはその繰り返しだった。

「ところで姐さんの名前をまだ聞いてなかったんだが、教えてもらってもいいかい？」

「私の名前かい。そうだね、随分と葉が回ってきたようだから意識のあるうちに教えてあげようか。私の名前は潘蓮玉。」

「潘蓮玉？どこかで聞いた事がある名前・・・」

突然、張載風が椅子から転げ落ちると、床に倒れてしまった。潘蓮玉は床に膝をつくとき、張載風の頭を抱えながらこう言うのだった。

「張載風は用心深い男だから注意しろ」って言われていたけど、話で聞いていたのとは随分と違うようだね。こんな単純な手に引っ掛かってくれるなんて。」

まるで我が子を愛しむ母親のように、張載風の髪を優しく撫でてい

た。

「今は体が痺れて思うように動けないだろう？やがて全身に毒が回ってあんたは死んでしまうんだよ。でもね、張載風。もしもあんたがこれから先、私だけに仕えてくれるっていうんなら助けてやっても良いよ。」

潘蓮玉は懐から解毒薬を取り出すと、床に横たわっている張載風にもよく見えるように目の前に差し出した。

「もつとも、命乞いしようにも体が麻痺して口が利けないかもしれないね。いい女っていうのはたくさん男に怨まれる運命にあるのさ、悪く思わないでくれよ。それに酒を飲みながら死ねるなんて、栄邑の酒徒にふさわしい最期だと思わないかい？しかもこんな美女に寄り添われて死ねるんだ、思い残すことはないだろう？」

完全に張載風が自らの手の内に落ちた事に安心しきった様子の潘蓮玉。随分と上機嫌な様子で張載風に向かって話し続けるのだった。

「さっきの坊やも、饅頭に仕込んだ毒にあたって今頃父親共々死んでいるだろうよ。あの世でまた一緒に旅が出来るなんて、良かったね。ウフフフフフ……。」

「お楽しみ中のところ邪魔するようで悪いんだが、俺はまだこの世に未練があるから、あんたの思い通りに死ぬ訳にはいかないな。それに、俺の好みは化粧の濃い女でも男に毒を盛る女でもない。だから、あんたに一生仕える訳にもいかないだよ。いい男っていうのもたくさん女の女に怨まれる運命にあるのさ、悪く思わないでくれよ。」

薬が効いている筈の張載風が突如口を利いたばかりか、自らの手をすり抜けて立ち上がった事に潘蓮玉は驚きを隠せなかった。

「俺はこれでも薬屋の端くれだ。多少は毒薬についての知識もある。『至心丹』って薬まで作って売っているのに、“毒薬で死にました”なんて事になったら信用問題だろ？」

「私の毒薬の成分は私しか知らない秘密の調合で作った完璧な物だ。他人に解毒薬など作れるはずがない。まして、どんな毒にでも効く

解毒薬などこの世には存在しない。そうだろう、張載風！」

潘蓮玉の表情は、先ほどまでの穏やかなものから一変して、張載風に対する憎しみで溢れていた。彼女の口から発せられる言葉の端々にも、その様子を窺い知ることが出来た。

張載風は慌てる風でもなく、潘蓮玉に教え諭すように説明した。

「その通り。『至心丹』は解毒薬ではないし、まして万能な解毒薬なんてこの世には存在しない。その代わり、あらゆる毒物に精通している人物ってというのは一人心当たりがあるんだが・・・今回の件とは関係ないし、それは俺でもない。

俺は酒を飲むのも得意なんだが“飲む振り”をするのも得意なんだ。尤も、わざわざ飲む振りなんかしなくても、飲み比べで負けた事は今まで一度もないけどな。」

毒薬が効かなかった理由が分かった潘蓮玉は、突如袖を一振りさせた。次の瞬間、風切り音がしたかと思うと、何かが撥ね返る音が響いた。張載風の手には机の上に置いてあった皿があり、足元に何本かの針が落ちていた。潘蓮玉が放った暗器を張載風が皿で防いだのだろう。

自分の放った暗器までもが張載風に防がれた潘蓮玉。形成不利と判断して、ここは一旦退く覚悟を固めた。既に店の入口付近には張載風が立っており、こちらからは逃げる術はない。店の奥まで逃げるには距離がありすぎる。それならば、と店の窓を蹴破って逃げようとするが、思うように体が動かなくなっているのに気がついた。

「一つ言い忘れていたんだが、お茶の中にしびれ薬を入れておいた毒の入った酒を飲ませるつもりが、反対にしびれ薬の入ったお茶を飲まされる事になると思ってもみなかっただろ？」

「そうか、それで飲み比べをやるうと言いだしたのか。あんな戯言を信用するとは思っていなかったが、まんまと嵌められた訳だ。」

「今度会う時は、正々堂々と飲み比べをしようじゃないか。もしも俺に勝ったら約束どおり借金の肩代わりをしてやるよ。それなら文句無いだろう？」

「あんな戯言、まだ信用している訳ではないだろうな。ハッ、とんだお人好しめ！」

「女の嘘に騙されるのが男の優しさなら、俺は喜んで騙されるまでさ。」

おい龍峨、もう出て来てもいいぞ。いつまで隠れているつもりだ！  
そう言つと張載風は、先ほど許龍峨が隠れた草むらに様子を見に行くのだった。

## 第9話

時は少し遡り、許龍峨が草むらに身を潜めたところから話を続ける事にする。

張載風の有無を言わせぬ真剣な様子に、しばらくは大人しく草むらに隠れて様子を伺っていた許龍峨だったが、戯れている二人の姿から次第に目を逸らすようになった。

辺りに何か面白そうなものでもないかと見渡してみると、先ほど張載風が放り投げた饅頭が道端に転がっている。詳しい理由も告げずに処分されてしまい、随分と勿体無い事をすると思っていた許龍峨であったが、さすがに今更拾って食べる訳にもいかない。

そうこうしている間にも、どこからか集まってきた野犬が三匹、饅頭に群がり始めた。先ほど店で見かけた野良犬の姿もそこにあった。

野良犬は野犬と比べると一回り程小さく、すっかり痩せこけていた。元々は白かったはずの毛並みも泥にまみれて薄汚れており、随分とみすばらしい姿をしている。近づいてくる野犬に向かってしきりに吠えているのは、久しぶりに手に入れた食事を横取りされないように守るためなのだろう。

対する野犬の方はというと、どれも見るからに獰猛そうな顔つきをしており、とても野良犬の敵いそうな相手ではない。案の定、纏わりつく邪魔物を簡単に突き飛ばすや、饅頭を貪り始めた。

それでもしつこく吠え立ててくる野良犬の様子に、しばらくの間は無視を決めていた様子の野犬であったが、とうとう業を煮やして三匹で一斉に襲い掛かり始めた。

草むらからその一部始終を眺めていた許龍峨は、野良犬があまりにも不憫に思えてしかたがなかった。そのため、近くにあった小石

を拾い集めると、それで野犬を追っ払おうと考えた。

許龍峨が小石を手にしたその時、彼のすぐ側で誰かの呼びかける声がした。

「小僧、その石を使って何をやらかすつもりだ。まさかそれで野犬を追っ払おうなんて考えているんじゃないだろうな？」

声のした方を見てみると、埃や泥にまみれた布の塊がこちらを向いていた。髪の毛は油じみて絡まりあい、黒光りしている。顔一面を覆っている髭と濃い眉に隠れて表情は分からなかったが、眼光鋭い瞳が許龍峨の方を見つめていた。

男は右手で頭を支えた姿勢のまま、なおも許龍峨に向かって話し続けた。

「お前さんが石を投げるのは勝手だが、そのせいで野犬の群れに襲われたらかなわん。余計な事はするな。」

「あんな小さな犬に三匹で襲い掛かるなんて、卑怯だとは思いませんか？」

「誰だつて食事や昼寝の邪魔をされたら腹が立つだろう。この辺りじゃよくある光景だ、ほつとけ。」

「しかし・・・」

「いいか、小僧。あの野良犬も野犬も、真剣に生き延びようとしてる事には変わりはない。お前さんが義憤を覚えて野良犬を助けるのは勝手だ。しかし、お前さんの投げた石で野犬が命を落とす可能性もある。お前さんが野良犬に代わって野犬に食われてやるっていうんだつたら話は別だが、そんなつもりはないんだろう？ だつたら余計な手出しはするな。あの野良犬も自分自身の力でこの状況を乗り越えられないようなら、遅かれ早かれどこかで死ぬ。それだけだ。」

「随分と冷たい言い方ですね。」

「どちらか一方に肩入れするっていうのは、野に生きている物に対して礼儀を欠く行為だと思わんか？ お前さんの正義と奴らの正義は違う。まあ、最終的には強い方が生き残る。それだけの事さ。」

そう言うと、浮浪者は寝返りをうった。

「例えあなたの言われることが真実であっても、私は自分の正義を曲げてまで見過ごす事は出来ません。あなたには迷惑がかからないようにします。それなら構いませんね。」

「せいぜい野犬の群れに食い殺されんよう、気をつけるよ。」

許龍峨の背に向かって浮浪者の激励の声が飛ぶのだったが、やはり手助けするつもりはないらしい。許龍峨は持てる限りの石を拾い集めると、単身野犬の群れに向かって投げつけるのだった。

石礫を浴びせられた野犬の群れは、突然の乱入者である許龍峨の方を振り返ると、唸り声を上げ始めた。許龍峨はこれまで、街中をうろついている野良犬を見る機会があったのだが、こうして野生の犬と対面するのは初めての経験だった。しかも三匹を相手に戦わなければならぬ。

凶暴性を宿した眼は決して獲物から逸らされることはなく、開かれた口元から覗く牙は容易く肉を切り裂く鋭さを持ち、激しい息遣いは相手に飛び掛る機会を伺っている。石礫の何個かは野犬の群れに命中したのだが、致命的な傷を負わずには至っておらず、むしろ彼らの憎悪を高めるだけの効果しかなかったようだ。

思わぬ攻撃に警戒を強めた様子の野犬の群れは、許龍峨を取り囲むような位置に移動し始めた。そして、徐々にこちらとの距離を縮めてくる。

やがて、その中の一匹が許龍峨に向かって飛び掛ってきた。その瞬間、許龍峨の脳裏に先ほどの浮浪者の言葉が浮かんできた。こんな所で死にたくはなかったが、三匹の野犬を相手に自分が勝てる見込みは少なかった。用意していた小石も、残りは僅かとなっていた。他に方法が無い許龍峨は、ただひたすら野犬の群れに向かって石礫を投げ続けていた。

気がつくくと、許龍峨の手前数歩の場所に先ほどの野犬が倒れていた。他の二匹に至っては、先ほどいた場所から一步も動いてもない

い様子だった。

「小僧、命拾いしたな。まったくもってお前さんは運がいい。まあ、野に生きていくからには力だけじゃなくて、運の良さっていうのも重要なんだが。」

草むらから先ほどの浮浪者が現れると、許龍蛾に向かってそう言った。

「あなたが助けってくれたんですか。ありがとうございます。」

「お礼に飯でもご馳走しろ！と言いたいところだが、そうじゃない。野犬の様子をよく見てみる。」

三匹の様子は、いずれも様子がおかしかった。四肢が硬直したような状態となっており、僅かではあったが痙攣している物もいた。

「まるで毒にでも当たったかのような……。」

「さしずめ、そこにある饅頭に仕込まれていたんだらうよ。お前さんの連れの判断は的確だった訳だ。」

「……そうだったんですね。じゃあ、野良犬は野犬のおかげで助かったんですね。」

「そうでもないんじゃないか？ 一歩間違えれば間違いなく野犬の餌食になっていた訳だし、単に運が良かったんだらうな。それよりも、気をつけないと今度はこっちが襲われるぞ。」

浮浪者に言われて野良犬の方を見ると、許龍蛾に向けて唸り声を上げているのだった。

「まあ、せっかく恩義をかけてやっても所詮は獣だな。こいつにとつてみれば野犬からお前さんに敵が変わっただけだ。さて、どうする？」

尋ねられた許龍蛾は、慌てることなく懐から干し肉を取り出すと、野良犬に差し出した。野良犬は干し肉には見向きもせず、許龍蛾の右手に噛み付いて放さなかった。傷口から真っ赤な血が滴り落ちて地面を濡らしていく。

「何をやっているんだ、お前。野良犬が人に懐くとも思っているのか？ とんだ甘ちゃんだな。蹴っ飛ばすなり、棒で叩くなりして追

「つ払うのが常套手段だろうが。」

「そう言うと、浮浪者が野良犬に近づいて蹴飛ばそうとする。」

「待ってください。しばらく、このまま様子を見させてください。」

「両者の睨み合いはしばらく続いていた。しかし、やがて野良犬は許龍蛾の右手から離れると、自らがつけた傷口を舌で舐め始めるのだった。それが終わると、許龍蛾の差し出した干し肉を美味しそうに食べ始めた。」

「野良犬を手懐けちまうとは大した奴だな。どれ、その右手を貸してみる。傷の具合を見てやる。」

「浮浪者はそう言うと、垢にまみれた手を差し出してきた。浮浪者の手は元の肌の色が分からないくらい真っ黒になっており、どのくらいの期間風呂に入っていないか想像もつかなかった。それでも、許龍蛾は戸惑う事無く浮浪者に自らの右手を預けた。」

「傷の具合はどうですかね。やっぱり医者に見てもらった方が良いのでしょうか。」

「これくらいなら大した傷ではないだろう。これでも塗っておけ。」

「浮浪者はそう言うと、何やら塗り薬を取り出し、許龍蛾に渡した。」

「許龍蛾は言われるままにその薬を傷口に塗りこんだ。」

「私の名前は許龍蛾といいます。あなたの事は何とお呼びしたら良いでしょうか。」

「俺の名前は……そうだな、“風来坊”とでも呼んでおいてくれ。」

「そうですか。それでは風来坊さん、どうもありがとうございます。」

「そう言うと、許龍蛾は風来坊に向けて深々と頭を下げるのだった。」

## 第10話

そんな許龍峨に向かつて、風来坊は黙って右手を差し出した。

「俺に対して礼などいらんし、頭を下げる必要もない。そんな事よりも、さっきお前に渡した塗り薬の代金を払ってもらおうか。」

風来坊の表情からは冗談を言っているような様子は窺えなかった。突然の申し出に戸惑いを隠せない許龍峨。

「どうした？まさか俺が善意でお前に薬をやったと思っっているんじゃないだろうな。最初に言ったはずだ、“お前さんの正義と奴らの正義は違う”ってな。お前と俺では住んでいる世界が違う。俺はどこちらかというところの野良犬と同じさ。そう簡単に手懐けられるつもりはないが。」

二人の近くで干し肉を食べている野良犬を指差しながら、風来坊は冷笑してこう告げるのだった。

許龍峨は風来坊の行動を思い返してみるのであったが、これまで彼が自分の味方をしてくれた事など一度も無かった事に思い至るのだった。それどころか、この得体の知れない男は、自分の側でただ面白そうに眺めていたのではなかったか。それを自分が勝手に信用してしまっていただけなのだ。店で注文した饅頭にすら毒が仕込まれていくらいだ。この男が先ほどの女の仲間だった場合、薬に毒が仕込まれていないという保証がどこにあるう。何の疑いも無く風来坊の差し出した塗り薬を使用してしまった事自体、そもそも間違いではなかったのだろうか。

急にこの風来坊という男の存在が不気味に思えてきた許龍峨は、何とかこの場を逃れようと言うのだった。

「あなたの動機はともかく、薬の代金はお支払いします。ただ、私はお金を持ち合わせておりませんので、連れにお願いして立て替えてもらうことにします。」

そう答えると、張載風がいる店の方へ向かって歩きだそうとし始

めた。しかし、風来坊はそんな許龍峨の行動を阻むかのように腕を掴む。

「お前が言っているのはこの事か。」

風来坊の手には、許龍峨の懐にしまつてあつたハズの財布が握られていた。先ほど傷の具合を見る振りをして懐を探られたのだろう。その中には優に一月くらいは遊んで暮らせる程の大金が入れられており、手に取るだけで分かるくらいにずっしりと重かつた。

それにも関わらず、風来坊はそれを許龍峨に放り投げてよこした。中のお金には一切手をつけられた様子はなかつた。

「俺が欲しいのは金じゃない。そんなもの無くても生活には困らん。それよりも俺が欲しいのは中央の鳳凰を囲むように二匹の龍の装飾が施された白い佩玉だ。どこに隠した。」

「白い佩玉？さて、何のことでしょうか。もしかしたら連れが何か知っているかもしれません。やはり、ちよつと呼んで来ましょう。」

そう言つて、風来坊に掴まれた腕を振り払おうとする許龍峨であったが、その手は緩められるどころかますます力が込められ、締め付けられるのだった。

「惚けても無駄だが、まあ良い。お前には張載風を誘き寄せる人質になつてもらおう。白凰双龍佩はその後ゆつくりと探すことにするさ。」

風来坊は許龍峨に手早く点穴（ ）を施すと、許龍峨を連れてこの場を立ち去るのだった。

そうとは知らぬ張載風。許龍峨の隠れている草むらに声を掛けてみるが、既にそこに人影はなかつた。辺りに残っているのは、三匹の野犬の死骸と一匹の野良犬の姿だけであり、空一面には死骸の臭いを嗅ぎつけた鳥の群れが集まつていた。

許龍峨の姿が見えないと分かつた張載風は、店に戻り潘蓮玉に問

いただきます。

「一つ確認したい。許龍峨を連れ去ったのは、お前の仲間か？それとも別のヤツか。」

床に倒れたままの状態と思うように体を動かすことが出来ない潘蓮玉は、憎らしげな表情で張載風の方を見返す。

「何でもお見通しの張載風様も、自分の連れが攫われるとは思わなかったみたいだね。ふん、いい気味さ。」

「もう一度尋ねる。許龍峨を連れ去ったヤツに心当たりがあるならすぐに教える。さもなければ女でも容赦はしない。」

その表情からは窺い知ることの出来なかつたが、張載風の語気を強めた言い方に、身動きの取れない潘蓮玉としては自分の知っている事を話すしかなかつた。

「私はあるたを殺してくれて、ある人に頼まれただけさ。あなたに連れがいるなんて話は聞いちゃいないよ。あの毒薬だつて、本当はその人に貰ったものなのさ。随分とあなたの事を憎んでいるみただったけど、何か心当たりでもあるんじゃないのかい？」

潘蓮玉はそこまで言うと、自分の言葉が張載風にどのような影響を与えるのか、しばらく様子を窺っていた。先程までの張載風の表情が少しだけ曇るのを潘蓮玉は見逃さなかつた。

「私よりも随分と年上のようにだつたけど、十分に綺麗な人だつたよ。女の私が見ても嫉妬するくらいにね。あの瞳には人を惹き付けるような魔力でも秘められているのかね。じつと見つめられると、どんな無理難題でも断われないような、そんな気分させられたよ。元々あまり感情を表に出さない人みたいだけさ、あなたの事となると随分と様子が奇怪しかつたからね、何か知っているんだろ？だからさ、私の事は許しておくれよ。」

体が痺れて思うように動けない状態の潘蓮玉であつたが、出来る限りの愛嬌を振りまいて張載風に懇願するのだった。

「別にお前に危害を加えるつもりはない。今は許龍峨を捜す方が先だ。他に何も知らないのなら、俺は先に行く。」

潘蓮玉を置いてその場を立ち去ろうとする張載風の所へ、汚い身形をした少年が近づいてきた。

「おじさん、張載風かい？」

突然自分の名前を呼ばれて、少年の方を向いた張載風。

「ああ。そうだが。何か用か。」

「これをおじさんに渡してくれって、さっき通りすがりの変な人に頼まれたんだ。」

少年は手にした手紙を張載風に手渡した。一通り目を通した張載風は、少年に尋ねる。

「坊や、その手紙を渡した人について何か覚えていることがあれば教えてくれないか？」

張載風は財布の中から小銭を取り出すと、少年にもよく見えるように目の前に掲げた。

「そうだな。浮浪者みたいな格好をしていたけど、あれはきっと偽物だね。」

「ほお、どうしてそう思うんだ？」

「だって、ちっとも臭くなかったんだもん。」

それだけ言つと、少年は張載風の手から小銭をひったくり、どこかに行つてしまった。

## 第10話（後書き）

点穴・・・全身に存在する特定の経穴を衝いて、経脈を遮断する技。各種の身体機能を封じたり、命を奪う作用があったりする。

## 第11話

張載風の手には、先ほどの少年から渡された手紙だけが残されていた。

突然の少年の登場に、すっかり取り残された感のある潘蓮玉。張載風を見上げる格好で声を上げると、必死に自分の存在を訴え始めた。「ちよいと！いつまで私の事を放っておくのさ。知っている事は話したんだから、いい加減何とかしておくれよ。今更、あんたを殺そうなんて思っていないからさ。」

ややあつて、潘蓮玉の方を向いた張載風が口を開いた。

「潘蓮玉。悪いが、少し力を貸して欲しい。」

先ほどまでの態度と一変した様子の張載風に、少々疑念の眼差しを投げかける潘蓮玉であった。

「どうしたんだい、急に改まつたりして。まあ、あんたの頼みは大體察しはつくけどさ、まずはこの状態を何とかしておくれよ。話はそれからさ。」

先ほど少年から渡された手紙を丁寧に折畳んだ張載風は、潘蓮玉の方を向き直り解毒薬を取り出して飲ましてやる。たちまち潘蓮玉の体の痺れはなくなり、動けるようになった。

「やれやれ。とんだ醜態を晒したもんだよ。こんな手に引つ掛かるとはね。」

先ほどまで強張っていた体は、まだ思うようには動かないらしい。体をほぐしながら呟く潘蓮玉に向かって張載風が声を掛ける。

「これから俺と一緒に錦香まで来てもらう。話はそれからだ。」

「ちよつとお待ちよ。誰があんたの頼みを聞くなんて言ったんだい？坊やを攫ったヤツの行方はその手紙で分かったんだろ？だったらあんた一人で助けに行けばいいじゃないか。これ以上、余計な面倒事は御免だよ。」

そう言つて、店を後にしようとする潘蓮玉。その背に向かって張載

風が声を掛ける。

「“金翅”とはどういう関係だ。」

潘蓮玉は振り返ると、嫣然とした微笑を見せながら張載風にしな垂れかかってくる。

「何だ、やっぱり知り合いなのかい。あんたも隅におけないね。私とあの人の関係だったら、さつきも話したとおりだよ。私はあんたを殺してくれて頼まれただけさ。そんな事よりもさ、あんたは一体どういう関係なんだい？女の勘ってヤツだけど、あれであの人心底あんたの事を嫌っている訳でもないみたいだしさ。」

「向こうがどう思っているかは知らないが、俺はこうして命を狙われたんだ。いい迷惑だ。それに・・・」

張載風は潘蓮玉の右腕を掴むと、袖を捲し上げた。真っ白な潘蓮玉の腕には、蝶の形を模した痣があった。

「これはどうするんだ。俺を殺せば、代わりに解毒薬を貰える約束だった、そうなんだろう？」

潘蓮玉は張載風の手を振りほどくと、袖を元に戻した。

「私があんたを殺すのに失敗したんだ。遅かれ早かれあの世行きさ！」

「やはりそうか。それなら尚のこと、俺と一緒に錦香まで来てもらう必要があるな。」

「錦香に行けば、この毒を治してくれるとでも言うのかい？」

「治るかどうかは分かんが、毒を抑えることくらいは出来るかもしれん。信じるか信じないかはお前の勝手だ。好きにすればいい。」

「あの坊やの方はどうするんだい？このまま放って置くつもりなんじゃないだろうね。」

潘蓮玉の問いに、張載風は先ほどの手紙を手渡した。手紙には丁寧な文字でこう書いてあった。

『月に住まうと伝え聞く仙女を愛でたく、栄邑の酒徒にお手紙いたします。当方、心ばかりの酒肴を用意し、お連れ様とお待ちしてお

ります。古式に則りまして白い佩玉等お召しになり、お越し頂きますようお願いいたします。』

「何だい、これ。招待主が誰なのか書いてないじゃないか。」

「錦香に九陽楼というのがあろう。月を愛でるならそこが一番だ。その店の持ち主が今回の招待主だろうな。ご丁寧に黒馬まで描かれているだろ。間違いないさ。」

張載風は手紙を受け取ると、問題の箇所を指し示しながら答えた。

「九陽楼……ってあんた、孟家を敵に回しているのかい。金翅だけでも厄介なのに。」

「いい男っていうのは、知らないうちに誰かの怨みを買うものらしい。ところで、潘蓮玉。秘薬を持って逃げた仙女の成れの果てを知らぬ訳ではあるまい？その美貌が失われるのは、何とも惜しいな。」

意地悪く微笑む張載風に、もはや観念した態の潘蓮玉が答える。

「何処でも好きな所へ連れて行けばいいだろう。あんたと出会ったのが私の運の尽きさ。ツキにまで見放されたんだらうよ。」

「そうそう。素直な女は嫌いじゃない。まあ、錦香まではそんなに距離もないし急いで向かうとするか。」

かくして、張載風と潘蓮玉の二人は共に、錦香の街に向けて旅立つのであった。

## 第12話

錦香は複数の街道が交わる交通の要所として、古くから栄えた都市であった。そのため、各地から多くの商人が移り住み、競い合うようにして店を構えたので、商業の街としても広くその名を知られるようになっていた。

絢爛豪華な建物がひしめき合うその姿は、まさに一幅の絵のようでもあり、それだけでもこの地を訪れた人々の目を楽しませるのに十分であった。中でも一際目を惹く建物、それこそが問題の“九陽楼”であり、この街を象徴する場所でもあった。錦香の北方に位置する常峨山を背に、遠方からでもその威容を見て取れる程であったため、旅人の多くは九陽楼を目印に錦香を目指すのが常となっていた。

「ちよいと、何もたまたしているんだい？ほら、あそこに九陽楼が見えているよ。この調子なら今日中には錦香の街に辿り着けそうだね。」

潘蓮玉が声をかけると、後方から張載風の声がそれに応じた。

「おいおい。そんなに急がなくても良いだろ？俺はあんまり軽功（くわう）が得意じゃないんだ。」

「だらしないね、男のくせに。もたまたましていて、金翅の毒が私の全身に回ったらどうするんだい？」

「錦香に着いたからって、姐さんの毒を治せるって保証した訳じゃないんだぞ。あくまでも抑えることが出来るかもしれないって話をしただけだ。それに……。」

歯切れの悪い言い方の張載風に、潘蓮玉が詰め寄る。

「まだ何かあるのかい？ああ、坊やの事だったら私も手伝ってあげるからさ、大船に乗ったつもりでいて構わないよ。それとも、まだ何か私に隠し事しているんじゃないだろうね。どうもあんたは油断が出来ないからね。」

「おっと、のんびり話している暇はなさそうだ。急がないと城門が閉まってしまふぞ！」

西の空へと傾き始めた夕焼けを指差しながら、張載風はそう告げた。「錦香の城門は、日の出と共に開かれて、日の入りと共に閉じられる決まりだからな。それ以外の時間は、例え相手が王であろうとも開かれないって話だ。」

それだけ言うと、錦香を指して一足先に出発する張載風であった。潘蓮玉としても錦香の街を目の前におきながら、また一晚野宿するつもりはなかった。すぐさま張載風の後を追いかけて始める。

風を切るようにして走り抜ける張載風。その背後、数歩遅れて軽功を駆使した潘蓮玉が付き従う。二人の軽功の腕が互角であれば、張載風の方が先に出発した分だけ有利である。しかし、二人の間に保たれていた距離は時を経ずして縮まっていき、潘蓮玉は張載風と肩を並べられる程に追いついていた。

（どうやら、軽功が得意じゃないって話は嘘じゃないようだね。）

これまでの道中、潘蓮玉が大人しく従っていたのには訳があった。“金翅の毒を治せるかもしれない”という張載風の言葉を真に受けた訳ではなかったが、それを利用せぬ手はないし、何よりも相手を油断させておいて、武芸の腕前を確認する必要があったのだ。

先のしびれ薬の一件に関しては、張載風を軽んじたあまりに後れを取る結果となってしまうたが、同じ手が二度も通じる潘蓮玉ではない。しかし、それは相手も同じであろう。それならば別の手段を講じれば良いだけである。

張載風の武芸の腕前は潘蓮玉にも未知数であったが、達人であればしびれ薬など使わなくても点穴を施すだけで足りたはずである。

“栄邑の酒徒”の名声は広く知られているが、所詮は薬売り。およそ武芸の心得があるう訳がない。

「どうしたんだい？もう息があがってきたんじゃないだろうね。」

「さっきも言っただろ？俺はあんまり軽功が得意じゃないんだ」  
って。さては姐さん、信用してなかったな。俺は単なる薬売りなん

だから仕方がないだろう？」

「兄さんは口が上手いし、随分と用心深いからね。どんな奥の手を隠しているか分かったもんじやないから、ちよつと疑っていたのさ。それに、普通の薬売りは軽功なんか出来やしなよ。」

「俺みたいに各地を歩き回る商売をしていたら、軽功くらい出来たほうが便利だろ？それである人に初歩的な部分だけ手解きしてもらったのさ。姐さんは随分と軽功が得意なようだから、今度良かったら手解きしてくれないか？」

普段と変わらぬ軽い調子で答える張載風であったが、その速度が僅かずつ落ちていくのが隣に並んでいる潘蓮玉には手に取るように分かった。

「私の軽功なんて、兄さんと変わらないわよ。とても指南出来るものではないわ。」

そう言うと、張載風の速度に合わせて走り続ける潘蓮玉。その後、二人は無事に錦香の街に辿り着いたのであった。

## 第12話（後書き）

軽功・・・全身を軽くする技。常人よりも身軽になり、素早く動けたり高く飛べたりする事が可能となる。

### 第13話

黄昏時に特有の薄暗さが辺りを包み込み始めるようになると、城壁の上には等間隔に篝火が焚かれ始めた。錦香の街は四方を堅牢な城壁に囲まれており、街それ自体が一つの要塞をなしている。街に出入りするための城門は、数えて東西南北の四門あり、それぞれに呼び名がついていた。張載風と潘蓮玉が立っているのはちょうど北門に当たっており、“黒武門”と呼ばれていた。

「さて、黒武門に到着した事だし、早いところ兄さんの知り合いつていうのに会いに行こうじゃないか。この街にいるんだろ？一体、何処に住んでいるんだい。」

黒武門を目の前にするや否や、潘蓮玉は張載風の方を向いてそう詰め寄った。それには答えずに、張載風は潘蓮玉を残して黒武門とは異なる方向へと足を向ける。

「ちよいと、一体何処に向うつもりだい。黒武門はこっちだよ。」

潘蓮玉の疑問に、張載風は振り返ってこう答えるだけだった。

「城壁沿いに少しばかり行った場所に、馴染みの宿屋があるんだ。今夜はそこに泊まる事にする。なに、錦香の宿屋に引けを取らないくらいにすっかりした場所だから、安心していいぞ。どっちにしろ、今日はもう随分と遅いから訪れるのは明日だな。」

「冗談じゃないよ。錦香の街に入れば宿屋なんて幾らでもあるじゃないか。幾ら馴染みの宿屋だからって、何も好き好んでそんな場所に泊まる必要ないじゃないのさ。」

潘蓮玉の疑問は至極尤もなものであったが、張載風の回答は更に理に適ったものだった。

「一体、その宿代を誰が支払っていると思っっているんだい？金は自然に湧いてくる物じゃなし、嫌なら姐さんには野宿してもらっしかないかな。」

これには潘蓮玉も返す言葉がなく、黙って張載風に従うのだった。

黒武門から僅かに離れた場所に張載風のいう宿屋はあった。看板すら掲げていないその宿屋は、そうと知っていなければ誰もが気付かずに通り過ぎてしまうような、随分と寂れた建物だった。内心の不満を隠すつもりもないらしい潘蓮玉は、その外観を目にした途端に益々機嫌を損ねた様子で、一向に口を開こうとしなかった。そんな連れの思いなどまったく意にも介さぬ風で、張載風は一足先に建物へと足を踏み入れるのだった。

外観とは異なり、中は随分と綺麗に片付けられている様子だった。店の中では子供が一人で掃除していたが、新たにやって来た客の姿を見ると、その手を止めてこう答えるのだった。

「宿をお探してでしょうか？それでしたら、ここからもうしばらく城壁伝いに歩いて頂くと、“華翠亭”というお店が御座います。そちらでしたら設備も整っておりますし、黒武門からの距離もそれ程離れておりません。よろしければご案内しましょうか？」

随分と慇懃な対応には違いないが、宿屋の店員らしからぬ申し出である。

「こちらの主人に用があつて来たんだ。これを渡してもらえれば分かるだろう。」

張載風は子供の言う事には構わず、懐から『至心丹』の包みを取り出すと、それを手渡して頼むのだった。

「好きな場所にお座りになって、少々お待ち下さい。今、主人に確認してきますので。」

子供は包みを手にすると、部屋の奥へと姿を消していった。潘蓮玉は言われるまでもなく既に席へと腰を下ろしており、頼杖をついた姿勢のまま何事が始まるものかと様子を伺っているようだった。その向かい側に腰掛けるようにして張載風も席を取った。

「いい加減に機嫌を直してくれよ、姐さん。見てくれは悪いが思ったより綺麗な所だろう？それに、こうしていると、姐さんと最初に会った時の事を思い出すよ。」

「私にしてみれば、あの日兄さんに出会ったのが運の尽きさ。人生最悪の一日だったよ。」

「そう言うなって。ここにこうして美男と美女が一人ずついるんだ。何の不足があるものか。もしも足りないモノがあるとすれば、この場に相応しい美酒ぐらいのものさ！」

「ハツハツハ。相変わらずですね、“栄邑の酒徒”。そろそろやって来る頃だと思って、ちゃんと目当てのモノは用意しておきましたよ。」

そう言うのと、奥から一人の男が姿を現した。宿屋の主人らしからぬ書生風の格好をしたその男は、荒縄を括りつけた甕を手土産に二人の元へとやってきた。主人の後ろからは、先ほどの子供が盆と杯を手に従っている。

「久しぶりだな、墨郎。相変わらず隠棲生活を満喫しているのか。そろそろこんな襪履宿なんか辞めちまって、外に出たらどうなんだ。」

「そっくりそのまま貴方にお返しますよ、載風。いい加減に怪しげな薬を売るのは辞めて、表舞台に出たらどうなのですか？」

墨郎と呼ばれた主人は席につくと、子供に何やら指示をして奥に引き取らせた。しばらくしないうちに、奥から三人分の食事が用意され、机の上に並べられていった。

「姐さん、こいつは穆陽過。宿屋の主人のくせに、家業そっちのけで水墨画を嗜んでいるような奴なんだ。そのせいで周りからは“墨酔家”と呼ばれている変人だ。墨郎、こちらは潘蓮玉。縁あって一緒に旅している仲間さ。」

張載風がお互いを紹介している間も、穆陽過は懐から半紙を取り出して、なにやらさらさらっと筆を動かしていた。

「潘蓮玉殿、お近づきの印にどうぞ。」

そこには、墨で描かれた潘蓮玉の姿画があった。それは非常に上手く描けていたが、描かれた彼女の背中には、蛾の翅を模した飾りが添えられていた。

この国では、蛾は美人の形容として用いられているため、潘蓮玉の容姿を蛾に擬える事自体は問題ではない。しかし、女性の姿画を描く時に花や蝶を書き添える事はあっても、蛾を書き添える事はしない。ましてや翅の生えた人など、それは既に人であって人ではない。そういった人ならぬ物を描く事は、妖を招き寄せるとして不吉な行為とされてきていたのだ。

また、蛾の翅というのは、その派手な紋様と翅に含まれる猛毒によつて忌み嫌われる場合があり、加えて“金翅”を意味する隠語でもあつた。殊更に翅だけを取り上げて描いたのは、穆陽過から潘蓮玉に向けての挑発であると疑わざるを得ない。

「野に咲き乱れる満開の花や、そこに舞い集う色鮮やかな蝶よりも、月光を浴びて光輝く鱗粉を舞い散らす蛾・・・そうですね“月蛾”とても言いましようか・・・その方が貴方の印象に相応しいように思います。如何でしょうか。」

穆陽過は涼しい顔で潘蓮玉に尋ねるのだったが、一方の潘蓮玉も特段に機嫌を損ねた様子も見せず、むしろ楽しそうに笑うのだった。「“月蛾”だつて？まあ、私には似合いの名前かもしれないね。それにしてもあんた、噂どおりの変人のようだね。この画は有難く頂戴するにしても・・・。」

潘蓮玉は素直に半紙を受け取ると、丁寧に折畳んで懐にしまい張載風の方を向いた。

「兄さんのいう知り合いつていうのは、この人の事かい？だったら早いところ頼むよ。」

その問いには答える様子もなく、張載風は席を立つと、壁に掛けられた水墨画の方に目をやった。

「墨郎、これは何だ？角の生えた黒馬の様にも見えるが・・・。まったく可笑しな画だな。」

目立つた家具調度のない室内において、壁一面に飾られたそれは一際目を惹くのがあった。張載風が指摘したとおり、中央には角の生えた馬の様な生き物が描かれており、その周りでは大勢の人々が跪

いて平伏していた。空には太陽が描かれており、遙か彼方には九陽楼と思しき建物があつた。

「この画を見た人は皆そう言うのですが、馬には角なんて生えていませんよ。私としては白鹿を描いたつもりなのですけれども、中々思うように描けなくてね。何度も手を加えているうちに、だんだん今の様な姿になってしまったという訳ですよ。これこそ、本当の“馬鹿”と言つんでしょうね。」

穆陽過は画を眺めている張載風の側に近づくと、本気とも冗談ともつかぬ口調でそう説明するのだった。

「そうか。しかし、この画には少し足りないモノがあるな。俺が書き足してやるから筆を貸してくれ。」

張載風は、空に月を、平伏している人々の周りに影を足していき、生き物の角と思しき部分には、筆を加えて冠に描き変えてしまった。

「水墨画なんだから、昼でも夜でも構わないだろう？ 九陽楼には太陽よりも月が似合いだ。ついでだったら、月も描いておくべきだな。そうになると、天空に太陽と月が輝いているっていうのに、周りに影がないと可笑しいな。それに馬には角はない。冠でも被せておけば十分だろう。ついでに署名もしてやるか。」

そう言つと、張載風は“栄邑の酒徒”と最後に署名するのだった。「成程、お陰で随分と良い画になりました。しかし、“栄邑の酒徒”が画を描いたとなると、悪い冗談にしか聞こえないですね。」

張載風の手から筆を取り返した穆陽過は“栄邑の晒徒”と書き直してやるのだった。

説明するまでもなく、鹿は王を、冠を被つた黒馬は不影、即ち孟宗徳を表しているのである。天上に輝く丸い物体は、水墨画である以上、太陽とも月とも判別がつかないため、見ようによっては二つの太陽が空に輝いているようにも受け取れる。しかし、空に輝く太陽が権威の象徴であるならば、これは随分と意味深な画であると言わざるを得ない。

一目見てその画が何を表しているのかに気がついた張載風は、穆

陽過に害が及ばないようにと自らの署名を書き加えたのだが、そこは穆陽過も心得たもので、咄嗟に“晒徒”と書き直したのだ。た。

「私に言わせれば、あんた達二人の方がよっぽど“馬鹿”だね。錦香から離れた場所ならともかく、こんな目と鼻の先でそんな画を描いて、反逆の罪にでも問われたらどうするんだい。面倒事は御免だよ。」

二人の遣り取りを黙って見ていた潘蓮玉であったが、やれやれといった様子で溜息を吐くのだった。

## 第14話

「客人とは珍しい事もあるものだ。錦香の街はすぐそこだと言うのに、わざわざこんな襪襦宿に逗留しようなんて考える人間が、俺の他にもいるとは思ってもよらなかつたよ。見たところ、随分と綺麗なご婦人をお連れのようにだが、孟家ばかりか王までも侮辱するような輩とあつては、到底見逃す訳にはいくまい？九陽楼の威容を目の当たりにしていながら、恐れ多くもそのような戯事をするなど・・・大胆不敵を通り越して、ただの命知らずと呼ばなければなるまいなあ。」

そう言つて、入口から見知らぬ人影が入り込んできた。思わぬ客の登場に、張載風と潘蓮玉がそちらを振り返ると、旅塵に塗れた衣服を纏い、手には瓢箪を持った、旅行者風の男の姿があつた。何よりも目を惹いたのは、男の容貌であり、例えようのない程に醜悪だつた。

男はそのまま三人のいる机に近づくと、穆陽過が持ってきた甕を手にとつた。未だ封がされたその甕からは、芳しい酒の匂いが漏れていたが、未だ手つかずのままだつた。

「酒に酔つた上での粗相であれば、大目に見ようとも思つたが、見たところ酒甕は未開封のまま。それとも、名にし負う“栄邑の酒徒”張載風は、酒を飲まずとも酔つ払つておられるとも言われるかな？」

男はそう言つと、挑むようにして張載風の顔色を窺つた。張載風は穆陽過の方を向き、この相手が誰なのかを尋ねようとしたのだが、穆陽過の方でもまるで男の顔に覚えがないとでも言いたそうな、困惑した表情を浮かべているのだつた。

「さてさて。貴殿の身柄を手土産にすれば、金翅は俺の事を厚遇してくれるだろうし、“張載風に反逆の意志有り”と告げれば、孟家は莫大な褒賞金をくれる事だろう。どちらに転んでも俺には損のな

い話。こんな幸運が偶然にも舞い込んできたとは、俺もよくよく運が良い。」

誰に向かつてといてもなく男が口にした言葉を聞いて、拙い事になってしまったと考えたのだろう。穆陽過が男の前に進み出ると、拱手して挨拶をするのだった。

「この宿の主人、穆陽過と申します。どうも何か考え違いをなさつておいでのようですね。これなるは私の友人で関才雲と申すもの。文盲のため物売りにて辛うじて生計を立てているような市井の者に、政に口を挟む事が出来るほど学を修めた者ではありません。天下にその名を知られた“栄邑の酒徒”がこのような襤褸宿に泊まる事は万に一つもある筈ありませんが、ここにて起こりました出来事の全ては主人である私が責を負うべきもの。どうぞ御内密にお願いたします。」

穆陽過の言葉など聞く耳持たぬという風で、男は手にした瓢箪に口をつけると、今度は潘蓮玉の方に向き直った。

「潘連玉。金翅に命じられた仕事を果たさぬままに、このような場所にてお目にかかるとは思いませんでしたよ。折角の自慢の美貌も長い年月を経てすっかり色褪せてしまったと見える。そうでなければ“栄邑の酒徒”お得意の口車に上手く載せられてしまったのでしよつか？まあ、恋は盲目と言いますから、惚れた男の為ならば死をも厭わない覚悟を決めたと言えなくもないのですが・・・」

謎の男は潘蓮玉の事も知っているようだったが、問われた潘蓮玉の方ではこの男が一体何者なのか分からない様子だった。しかし、これだけ内部の事情に通じているのであれば、金翅の差し向けた追っ手かも知れぬと思い、一瞬身構えるのだった。

「人の顔を覚えるのは得意としているんだが、もう少しこちらに来てその顔を良く見せてくれないかい？こつ暗くちゃ、どうにも思いつきそうにないんだよ。」

潘蓮玉は右手を袖の中に隠したまま、左手で男を手招きするのだった。

「おっと、その手には乗らないよ、月蛾美人。お前さんの得意は毒薬だったな。俺は色香に惑わされて毒を盛られるような間抜けじゃない。」

そんな事よりも、どうだ？口先だけのしがない薬売りなんかに与せず、俺の方につかないか。もちろん取り分は山分けだ。何だったら俺からも金翹に口添えして、お前さんの毒を取り除いてもらうように頼んでみてもいい。お前さんにとっても良い話だとは思うんだが。」

自らの手の内を見破られた潘蓮玉であつたが、嫣然とした表情は崩さないままで男に向つてこう答えた。

「お生憎様。同じ丸でも月と鼈とでは随分と違つたろう、それと同じさ。月に靡く蛾はいても、鼈に靡く蛾なんてこの世にはいやしいよ。旦那がもう少し光を放つくらいのも男前だったら、少しは悩むんだけどね。まったくもつて残念だよ。」

潘蓮玉の答えに、男は特に気分を害した風でもなく、相変わらず平然とした顔をしていた。それどころかむしろ、この成り行きを面白がっているようにも見えるのだった。

男は手にした酒甕の封を外すと、手近の杯に注いで張載風に勧めるのだった。

「貴殿が月で俺は鼈か。まあ、人の顔色ばかり窺っているような俺のような男には、相応しい喩えだと言えるかもしれんな。ところで張載風殿、月は太陽の存在があつてこそ、その輝きを増すものだ。」

貴殿の太陽は、一体何処に隠れてしまったのだらうな？山に登つたか海に潜つたか、はたまた冥府に沈んだか。」

張載風はその杯を受け取ると一息に飲み干してこう答えた。

「随分と可笑しな事を言われる方だ。太陽であれば雲に隠れるのが道理。雲は何もしなくても、いずれ風に載つて何処かへと流れていくもの。俺が探しているのは一匹の龍。峨峨たる山の許に住むと伝え聞くが、生きて帰れる保障はない。貴殿であればどうなさるか？」

そう言うと、杯を満たして返杯した。張載風から杯を受け取った男は、こちらで一息に飲み干してこう答えた。

「さてさて、それは難儀な話だな。貴殿が自ら進んで死地に赴こうとしているのであれば、徒に司直の手を煩わす事もあるまい。先ほどの一件は全て水に流すとして、貴殿の生死については天の裁きに委ねる事にしよう。」

男は席を立つと、懐から油紙に包まれた固まりを取り出して机の上に乗せた。

「張載風殿。素晴らしき銘酒をご馳走になりながら、生憎と今は持ち合わせがない。代わりにこれを置いていくから、受け取っておいてくれ。お礼は後日、改めてさせて頂く。」

そして、穆陽過の方を振り返ると拱手して告げた。

「亭主。夜分遅くにお騒がせして、大変申し訳ありません。今宵は別の場所にて宿を取ろうと思うので、これにて失礼します。」

最後に潘蓮玉の方に向って会釈すると、男は何処かへと姿を消したのだった。

男の後を追おうとする潘蓮玉を、張載風が片手を上げて制する。

穆陽過の方でも、今では何事もなかったかのような顔で席に着いていた。一人合点がいかない潘蓮玉が二人に尋ねる。

「ありや、一体何者なんだい？それに二人とも、あいつの後を追わなくて大丈夫なのかい？」

張載風は空いた杯に酒を満たすと、一つは穆陽過に、もう一つは潘蓮玉に差し出して席を勧めた。

「まあ、姐さん。ここに来て一緒に酒でも飲まないか？それにしても墨郎。お前、始めから気がついてたんだらう？まったく人が悪いな。うっかり姐さんが手を出したらどうする積もりだったんだよ？」

穆陽過は張載風の手から杯を受け取ると、こう答えた。

「私も実際にお目にかかるのは今回が始めての事でしたけど、全ては尤施殿の手配。私に責任はありませんよ。天眼通の方でも、案外

乗り気だったみたいですし……。」

「冗談じゃないぜ、まったく。尤施殿もとんでもない人を使い遣したもんだ。俺が天眼通を見知っているから良いものを、とんだ茶番だな。」

「“天眼通”って……、じゃあさっきの醜男があの手東洛だつていつのかい？」

一人驚く潘蓮玉に向って、仰々しく穆陽過が頭を下げる。

「左様でございます、月蛾美人。かの者こそ、その名を知られた天眼通。凄腕の占師としての名声を誇りながらも、先王の死を予言したとして都を追われた者でございます。彼が錦香の街に向っているという噂が広まったものですから、街の警備が通常よりも厳しくなっております……お気づきになりませんでしたか？」

そう言うと、張載風の方を振り向いた。張載風は頭を掻きながら、穆陽過の後を継いだ。

「まあ、そういう事だ。黒武門に到着したのは良いんだが、どうも緊迫した雰囲気か漂っていたんで、念のために様子を見たんだ。まあ、お陰で色々助かったんだが。」

張載風は管東洛の残していった固まりを手に取ると、中を改めた。それは白凰双龍佩だった。

## 第15話

「ところで載風。貴方が今回、この錦香にやって来たのには色々事情がありそうですね。私は天眼通ではないので、何でもお見通しという訳にはいきません。詳しく説明してもらえませんか？その佩玉も何か関わりがあるのでしょうか？」

穆陽過がそう尋ねるので、張載風は許龍蛾が佩玉を拾ってきた事、許尤施に頼まれて許龍蛾と一緒に旅して来た事、潘蓮玉と出会った事、許龍蛾を攫われた事、そうしたこれまでの経緯について順を追って説明してやるのだった。その話を聞きながら、穆陽過は筆を取ると、何やら紙に書き付けていく。

張載風の説明が終わる頃には、既に幾つかの水墨画が完成していた。穆陽過はその中から黒馬と蛾の画を選ぶと、机に並べてこう言った。

「敵は孟家と金翅の双方。どちらか片方だけでも厄介な相手なのに、その両方から付け狙われている。そういう事ですか？」

「多分、そうなんだろうな。」

まるで他人事のように答える張載風。それを一瞥しただけで、先を続ける穆陽過。

「これまでの経緯からすると、孟家の狙いはこの白鳳双龍佩であると考えてまず間違いないでしょう。それ以外に孟家と貴方を結ぶ接点はありませんし、自分から災いを背負い込む程馬鹿ではないですよね？」

穆陽過は佩玉を手にとると、黒馬の画に重ねる。

「もちろん、裏で何をやっているか分からん連中だが、こちらから喧嘩を仕掛けるつもりはない。そもそも相手が悪すぎる。」

「そうなんですよね。そもそも、佩玉を盗んだのは謎の少女。孟宗徳の愛馬“不影”と一緒に姿を晦ましてはいるが、佩玉を失くした事に気がつけば、取り戻しに来る可能性は高い。しかし、彼女が一

体何者なのかは不明のまま。代わりに孟家の手の者と思われる人物からの手紙が届けられる。」

そう言つて、佩玉の上に少女の姿画が重ねられる。

「結局、一緒に旅行していた尤施殿の御子息が人質に取られ、九陽楼に向う破目になつた・・・と。要は、佩玉と引き換えに御子息が無事に取り戻せれば万事解決という訳ですね。」

子供の姿画と九陽楼の画が重ねられる。

「まあ、そんな所だな。もともと、佩玉はくれてやっても良いが、俺の命までくれてやるつもりはない。」

「ところで、問題なのがもう一方の金翅の方ですが・・・。」

蛾の画が描かれた紙を手にとると、穆陽過は思案顔で張載風の方を見た。

「金翅と言えば東西無敵の毒の名手として恐れられ、その気性は残忍にして冷酷。各地に大勢の部下を従え、自分の意に副わぬ者には死の制裁を下すという噂の毒婦。自分への絶対服従を実現するため、部下には特別な毒薬を与えており、解毒薬と引き換えに命令を実行させているとか。一説によると、齢八十は既に超えていると言われているんですが、その容貌は一度目にした者を虜にする程の美しさだそうです。」

蛾の画の上に美人画が重ねられる。

「さて一方の張載風と言えば、名は広く知れ渡つていても所詮は市井の薬売り。しかし、至心丹は名薬と噂され、これが良く効くと大評判。毒と薬は似て非なる物ですから、お互い相容れないのは世の道理。例えるならば水と油と言つたところ。」

美人画の上に至心丹が重ねられる。

「ところで、この至心丹に金翅の毒を解毒する効果が秘められていると言つような秘密でもあれば、金翅の方でも“張載風憎し”と思つところでしょうが・・・。」

「そんな効果がないのは、俺が一番良く分かっているさ。何しろただの小麦粉だからな。」

張載風の言葉に、穆陽過は苦笑する。

「その通り。それならば、金翅の毒に敵う者などこの世にいない。どれ程の達人であれ、解毒剤の分らない毒には対抗しようがありませんからね。まして、張載風など恐れるに足りぬ存在。取り立てて執拗に命を狙う必要もないと思われのですが・・・一体、どのような因縁があるんでしょうね？」

面白そうに張載風の方を見る穆陽過の言葉には、何やら含むところがあるらしい。

「墨郎、屋敷に籠もって水墨画ばかり描いているうちに、全身に墨が染み込んで性格まで真っ黒になったんじゃないのか？勿体ぶつた言い回ししやがって。」

「ここからが面白い所なのですがね。そもそも、月蛾美人にも分かりやすいようにと思つて、貴方と金翅の関係について順を追つて説明しているんじゃないですか。」

「それが余計なんだよ。やっぱり早いところこんな襪履宿なんて引き払つて、外に出るんだな。清々しい外の空気に触れて、全身綺麗さっぱり清めて来い。」

穆陽過は再び筆を取ると、紙に何やら書き付けて至心丹の上に重ねた。そこには酒の画が描かれていた。

「そもそも、こんな事になつたのも自ら招いた災いですからね。酒の席での事とはいえ、金翅を怒らせるような真似をするからですよ。」

「そのせいで俺は、一度死に掛けたんだ。いい加減に諦めて欲しいものだよ。」

やはり張載風と金翅の間には浅からぬ因縁があるらしい。しかし、潘蓮玉が幾ら尋ねても、穆陽過の方でも笑つて誤魔化すばかりだし、張載風に至つては口を開きそうにない。それ以上に詳しい話までは、現時点では明らかにされないままだった。

しかたなく机の上に置かれた佩玉を手にする潘蓮玉。

「孟家が欲しがらくらいだから、さぞかし立派なお宝なんだろうけ

ど、こんな物に一体何の価値があるって言うんだらうね。すっかり薄汚れている上に、あちこち欠けている箇所もあるじゃないか。天眼通もこんなもの運んでくる暇があるんだったら、もうちよつと役に立つ助言でもくれればいいものを、評判倒れも良いところだよ。」  
危なっかしい手で弄ぶ潘蓮玉の手から、早々に佩玉を取り上げた張載風。

「天眼通を悪く言うなよ。この佩玉がないと九陽楼には入れてもらえないどころか、龍峨を取り返す事も出来ないからな。招待状にも書いてあっただろ？」古式に則りまして白い佩玉等お召しになり、お越し頂きますようお願いいたします”ってな。これはそのための通行許可書みたいなもんだ。」

張載風はそう言うと、穆陽過に手渡した。

「どうだ、墨郎。何かこいつに特別な秘密でも隠されてないか、調べてくれないか？」

穆陽過も色々と佩玉を眺め回していたが、やがて張載風の手に戻すところ言った。

「細工は素晴らしいのですが、やはり佩玉としての価値は無さそうですが・・・やっつ！」

「どうした、何か分かったのか。」

「この触感、この重量感。これなら、文鎮にはもってこいだなあと思ひまして。」

穆陽過の手から佩玉を奪い返した張載風は、それを丁寧に包み直す、自らの懐の中にするのだった。

## 第16話

空に星が瞬いては消えていくように、月が形を変えながら夜空を巡るように、穆陽過の屋敷での一夜は、そうと気付かない間にも、確実に過ぎ去っていくのだった。それが証拠に、皿に盛られていた箸の食事は、少しずつではあっても確実に姿を消しており、甕に満たされていた箸の酒に至っては、まるで底に穴でも開いていたのではないかと疑いたくなるほどに、速やかに無くなっていた。部屋に残されていくのは、何も乗っていない空の皿と空っぽになった酒甕だけであった。

夜も次第に更けていこうというのに、張載風の勢いはなおも衰えるところを知らなかった。その向かいでは、潘蓮玉がほんのりと頬を赤らめていたが、その振る舞いには常と異なるところは見られなかった。まだ幾分余力を残していると思われる。その中でただ一人、穆陽過だけが下戸ではないにしても酒量において遠く二人に及ばず、並々と酒が注がれたままの杯はいつまでたっても減る気配を見せなかった。

「申し訳ありませんが、今宵は少々飲みすぎたようです。構わずそのまま続けて下さい。」

やおら穆陽過は席を立つと、二人に向って挨拶をした。

「墨郎、何処に行くのだ？」

「しばらく外の風に当たって、酔いを醒ましてきます。何かあれば下男に命じてください。」

酔いの回った身体を引き摺って屋敷の外に出た穆陽過。熱った身体に吹き付けてくる夜風が心地よく感じられ、遠方に聳える九陽楼を何とはなしに眺めていた。張載風は許龍峨を救いに単身、九陽楼に乗り込むことだろう。管東洛が言ったとおり、その生死は分からない。もしかしたら今宵、この時が永久の別れとなるのかもしれない。そう考えると、張載風をこのまま見送って良いのだろうかと思

まないでもなかつた。

「お主、何をそんなに悲しんでおるのじゃ。何をそんなに思い悩んでおる。」

暗がりの中から誰とも知れぬ声が聞こえたかと思うと、程なくして月明かりが一人の老人の姿を映し出した。この辺りでは見かけない顔だったが、穆陽過の視線の先にある九陽楼が悩みの原因であると勘違いした老人は、こう付け加えるのだった。

「九陽楼から望む月は素晴らしいと聞き及んでいるが、儂に言わせればあそこは少しばかり騒々しいわい。九陽楼に登ったところで、月に手が届く訳でもなし、眼下に広がっているのは高い城壁に囲まれた代わり映えのしない街並みばかりじゃ。それよりも、春の夜に相応しく、散り行く花を愛でながら月見酒とするが上等と思うが、どうじゃ？」

草むらに腰を下ろした老人の傍らには酒甕があり、手には杯を手にしていた。

「悲しむ事があるとすれば、満開の花びらがこうして儂く散っていく様を、ただ黙って見ているだけしかないという事でしょうね。思い悩む事があるとすれば、それを惜しんでいる自分がありながらも、その姿を留めておく事が出来ないという事でしょうね。」

老人の側に腰を下ろして、穆陽過がそう答える。

「花が咲くのも散っていくのも、全ては己の為であり、誰か他の者を喜ばせるためではない。それが証拠に、誰に頼まれた訳でもないのに、花はこうして毎年咲いては散っていくではないか。それが“自然”の有様であれば、何を悲しみ、思い悩む事があるうか。」

「ご老人にあつては、この世に悲しむ事や思い悩む事などないと言われるのか？」

穆陽過の問いに、老人は立ち上がって答えた。

「悲しむ事があるとすれば、こんな夜に月と影を相手にただ独り酒を飲んでいる事くらいじゃ。思い悩む事があるとすれば、月は酒を飲みはせんし、影は儂に従うだけという事くらいじゃ。」

そう言つて老人は、花びらを浮かべたままの杯を干す。

「それでも、春が過ぎ去つていくその時までには、こうして酒を飲んで楽しむ事にするわい。儂が歌えば月は夜空に舞うじやろうし、儂が舞えば影は地に踊るじやろうからの。」

妙な事を言う老人だとは思つたのだが、一方でその言動に些かの興味を覚えた穆陽過は、しばらくこの老人の相手をする事にしたのだつた。張載風と潘蓮玉の二人については放つておいても構いはしないにしても、こんな見ず知らずの老人の相手をするなどまったくもつて酔狂な話である。穆陽過自身はその事を、酒のせいにしたようだつた。

「私で良ければお相手いたしましょう。歌や踊りは出来ませんが・・話し相手くらいにはなれるでしょうから。」

「それならば、お主に尋ねよう。夜空に輝くあの月と暁の都“華都”ではどちらが遠いと思われる?」

普通であればもちろん、“夜空に輝くあの月の方が遠いでしょう”と答えるところである。何故なら、華都を訪れた者はいても、月を訪れた者などいないからだ。しかし、この老人をからかつてやろうと考へた穆陽過は、こう答える事にしたのだつた。

「華都の方が遠いでしょうね。月は何処にいても見る事が出来ますが、華都はここからでは見えませんからね。」

穆陽過の答えを聞いて、老人は大いに満足したように頷くのだつた。

「そうとも、そうとも。月など華都に行く事を思えば近いものだ。儂などはこれまでに何度も足を運んだ事がある。」

思いもかけぬ老人の答えを意外に思つた穆陽過であつたが、相手は酔つ払いだと思つて話を合わせることにした。

「そうですね。聞くところによると月には“月宮”と呼ばれる場所があり、不老不死の薬を持った仙女が住まうとか。是非ともお目にかかりたいものですな。」

「そんな事など容易い話だ。」

老人はそう言うと、懐から紙と筆を取り出して橋の画を描き始めた。そして、画が完成するや息を吹きかけて地面に放ると、紙の中から月まで伸びる銀色の架け橋が現れるのだった。突然の出来事に穆陽過が訳も分からず驚いているのを尻目に、老人はまるで自分の後について来いと言わんばかりにその橋を昇っていくので、穆陽過もそれに従って橋を昇っていく事にした。

しばらく行くと、鮮やかな光と共に寒気が身に染みてきた。やがて、目の前に銀色の建物が見え始めると、前を進んでいた老人が突如立ち止まり、穆陽過の方を向いてこう告げるのだった。

「あれが月宮じゃ。あの中にお主が言っておった仙女が住んでおる。しかし、仙女は人に姿を見られるのを極端に嫌っておるから、ここから先は一切口を利用してはならぬ。よいな。」

そう老人に念押しされるので、穆陽過は同意の印に頷いて見せるのだった。

老人に導かれるままに月宮に赴くと、中では酒宴の最中で、白い絹の着物を身に纏った数百人の仙女が、これまでに耳にした事がないような音楽に合わせて舞い踊っている姿が目に入った。彼女達はいずれも目を見張るような美人揃いであったが、一段高い場所からその舞を眺めている一人の女性の美しさの前には、それすらも霞んで見えるほどだった。穆陽過が内心、彼女こそが月に住まうと伝え聞く仙女であろうと思ひ、その美しさに思わず溜息を吐いた途端、それまで聞こえていた音楽が止んだかと思うと、辺りが急に暗くなり、穆陽過の足元が崩れ落ちた。

「墨郎、おい墨郎。こんな所で寝ていたら風邪引くぞ。いい加減に目を覚ませ。」

穆陽過が目を開けると、側には張載風と潘蓮玉の姿があった。

「ここは一体……。月宮は？月の仙女は？」

「何を寝惚けた事を言っているんだ。ここはお前の屋敷の庭だぞ。いつから月宮になったんだ？」

「そうだよ。あんたの帰りが遅いんで、気になって様子を見に来たんじゃないか。」

そう言われて穆陽過が辺りを見渡してみると、確かに自分の屋敷の庭の中で、空には未だに月が出ていた。

「私は夜風に当たるつもりで外に出て、それから見知らぬ老人に会って……。」

今までの記憶を辿りながら、穆陽過がこれまでの出来事を二人に語って聞かせるのだが、二人とも笑っているだけだった。

「大方、酔っ払って夢でも見たんじゃないのか？俺達が来た時には老人なんていなかったぞ。」

「そうだよ、春とはいえ外で寝るにはまだ早いよ。風邪でもひいたらどうするんだい？」

「それもそうですね。今日は普段とは違って美女にお目にかかったせいで、そんな夢を見たのでしょう。それでは改めて、屋敷の中で飲みなおすとしましょうか。」

張載風と潘蓮玉を連れて屋敷へと戻る穆陽過であったが、何処からか聞こえる老人の笑い声を耳にしたような気がして、一瞬だけ後ろを振り返るのだった。その瞬間、暗闇に溶けて消えていく銀色の架け橋を見たように思ったが、月光に照らされた庭にはそのような物など何も残されてはおらず、全ては酒に酔った拳句の幻であったかと、自分自身でもそう考えるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9319e/>

---

紅梅記 【黎明編】

2010年10月9日03時34分発行